



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2025第930回 公明連立離脱！どうなる？日本と移民問題

R7/10/10

パネリスト：

- 石井孝明（ジャーナリスト）
- 河合ゆうすけ（埼玉県戸田市議会議員・日本大和党代表）
- 北村晴男（参議院議員）
- ジェイソン・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）
- 石平（参議院議員）
- フィフィ（タレント・コメンテーター）

司会：水島総

水島「皆さん、今晚は」
一同「今晚は（礼）」

水島「闘論！倒論！討論！2025第930回目の討論となります。今日はタイトルを替えさせて戴きました。この2時間前に公明党が連立から離脱する形で、何十年も続いた自公の連立が崩れるということになりました。これは結構、大きな事じゃないかと思えます。そういう意味でも、今日は移民問題と、これからの日本の行方を、皆さんと話し合うつもりですけれども、こういう状態が起きたので、予め言っておきますと、皆さんには突然で申し訳ないですけど、公明連立離脱についてコメントを戴きたいと思えます。皆さんには期待していますので、どういうコメントでも構いません。では、早速、ご出席の皆さんをご紹介します。まず参議院議員、北村晴男さんです。宜しく

お願いします」

北村「宜しくお願いします。お願いしまあ～す」

水島「今回、討論には初登場して戴きます」

北村「はい」

水島「有難うございます」

北村「お願いします」

水島「参議院議員の石平さんです。宜しくお願いします」

石平「お願い致します、どうも」

水島「ジャーナリストの石井孝明さんです」

石井「宜しくお願いします」

水島「今回、初めて登場戴きます。タレントでコメンテーターのフィフィさんです。宜しくお願いします」

フィフィ「はい。宜しくお願いしまあ～す」

水島「歴史学者で麗澤大学国際学部准教授、ジェイソン・モーガンさんです。宜しくお願いします」

モーガン「お願いします」

水島「そして埼玉県戸田市議会議員の日本大和党代表、河合ゆうすけさんです。宜しくお願いします」

河合「宜しくお願いします」

水島「はい。今日は、このメンバーでお送りします。冒頭に言いましたように、公明党が自公連立から離脱しました。やはり公明党というのは、中国とも大変親しいというか近い関係で、石破内閣も親中と言われていました。そういう中で、今回、高市さんは逆の方向だということと言われています。そういう中で、このことが起きました。皆さんにコメントを戴いてから、本格的な議論に入りたいと思います。北村さん、突然ですけど、宜しくお願いします」

北村「まあ、高市さんにとっては、党内的には痛手だと思いますと。ただ、高市さんがやろうとする政策について、公明党が足を引っ張り続けることは間違いなかったもので、中長期的に見たら、めちゃくちゃ、いいことだと思います。この公明党離脱が、保守が結集できれば、日本にとっては最高の結果になると思っています」

水島「うん」

北村「はい」

水島「ということはプラスに考えた方がいいってことですね」

北村「はい」

水島「はい、有難うございます。石平さん、お願いします」

石平「私も北村先生と全く同じ意見でございまして、ある意味では公明党と組んでからの26年間、自民党は保守政党からどうなるかっていうことでね、段々変わっていきまして、安倍元首相ですら公明党という癌を切ることが出来なかったということで、今回、図らずとも高市総裁の歴史に残る最初の仕事（笑）にさせてしまったっていうような…長期的に見れば当然、日本の政治にとって良くなると思います。

但し、今後、短期的には恐らく高市総裁にはどうするかっていう、まあ、凄く困らせる面もあるんですよ」

水島「うん」

石平「その背後には、恐らく中国共産党の意向も働いているのではないかと、いや、現実に、実際、公明党の幹部は中国の大使と会談してから、自公連携の会議に臨んだんですか

らね。だから、そこは、まだ推測の域は出ないんですけど、要するに中国共産党が公明党を使って、まず高市総裁にパンチを与えるという、もう、そういう背景もあるかもしれません」

水島「そうですね」

石平「うん。でもね、長期的に見ればいいことですよ。うん」

水島「はい。有難うございます。それでは石井さん、お願いします」

石井「まあ、ちょっと名前は言えないですけど…」

水島「別に言ってもいいですよ」

石井「ある国会議員が高校の先輩だったので、もう4～3年前ですが、お話しした時に『踏まれてもついて行きます下駄の雪』と言ったんですね（笑）。つまり、どんなことをされても公明党は付いて行かざるを得ないんじゃないか、これだけポジションを貰ってね」

水島「ああ、そういう風に、べったりになっているから」

石井「これはお笑いの川柳ですね」

水島「うん」

石井「つまり男女関係の例えですけど、それをポツリと言ったので、ええっと驚いてしまいました。ただ、それでもお二人の先生がおっしゃったように、プラスの面が多いのと、今から話す外国人問題の過去を、たっぷり調べた訳ですけど、免許とか滞在資格の曖昧さとか資格更新の制度とか、まだ曖昧なまま残しているところが沢山あるんですけど、どうも自民党がやりましようとして提案すると、潰されて来た歴史があるんですね。

外国人問題について言うと、高市さんがゼロベースで見直すという期待の出来ること、僕は、あまり期待していないんですけども、期待の出来る言葉を言ったので、かなり見直しが進む可能性はあるかなあと期待しています。日本の悪いところですけど、一度作ってしまうと、日本の制度とか行政って、かなり直せないですよ。

だから今、話題になっているところでチャンスが訪れたかなあという感じはします。これは外国人を排斥するという意味ではなくて、適切な形で共生社会を創る為の準備が出来たんじゃないかと。公明党は、ちょっと感情的に外国人の権利を認めて、最後は参政権まで、ずっと主張していましたから、これは、いいことだと思っています。

水島「そうですね。前に外国人の土地取得の問題で、自民党の保守系がやった時、丁度、尖閣で魚を獲って来て議員会館で、みんなに食べて貰った時があったけど、その時、山田宏とか青山繁晴とかね、こういう人達が来て、水島さん、半歩しか出られませんでしたって言った。その半歩というのは、いわゆる換骨奪胎と言うか、骨抜きにされちゃったと。はっきり『公明党です』と言って、それは何ともならなかったのって言ったら、何ともならなかったと。向こうは強いんですと。

つまり運用の問題で、企業活動とか上手くいかないとか色んな理由を付けて、結局、外国人がどんどん土地を買うことが出来るようなことを続けてしまった。だから当分、この運用は色々考えられるけれども、運用自体は政府が変わらないと駄目だけど、そういう状態でしたね。だから、おっしゃるところは移民問題でもネックになっていましたね。はい。

ではフィフィさん、お願いします」

フィフィ「う～ん、私は公明党の存在というのは、今、そもそも公明党で、そんなに票が取れるかというか、実はあまり求心力もなくて、教祖も亡くなられたし、あと高齢化している」と

水島「うんうん」

フィフィ「所謂、創価学会の信者が」

水島「うん、うん」

フィフィ「そうすると、今、公明党と一緒にくっついていて何が利点かというのと、まあ、恐らく応援ですよ」

水島「うん」

フィフィ「電話をかけてくれるとか、特に地方の議員さんですよ。ちょっとの票の差で勝てるじゃないかみたいところで、推しで応援してくれたりとかして、先生、先生ってね。自民党の方は、そこを期待したんでしょう」

水島「はい」

フィフィ「そうすると、この構造って何と言ったら、はっきり言って、統一教会と全然、変わらないですよ」

水島「うん」

フィフィ「だから、普通だったら公明党っていうか、創価学会と公明党の関係性。そして、その与党に入り込んでいる。ここにメスを入れなきゃおかしいですね」

水島「うん」

フィフィ「今、統一教会なんて韓国では、犯罪者みたいな扱いですよ。おかしいカルト。それと同じような構造でやっているのが、公明党と自民党の関係。あたしねえ、これを情けないと思っでいて…」

水島「はい」

フィフィ「そもそも自民党の議員の中に公明党の応援っていうか、創価学会の信者の応援が無きゃ当選しないって言って、ずうっと自公連立の解消を渋っている人間が居たんですけど、是非、今回、公明党に行って載きたい」

水島「うん」

フィフィ「一緒に持って行って欲しいぐらい。そんなに情けない自民党という姿を、保守の人間達の誰が応援しますか。だから言ったんですよ、この間の参議院選で、日本保守党だとか参政党に。情けないですよ。これから多分、高市さんが首相になれるかどうか判らないって凄く大きな課題に向き合わなければならないんだけど、あたしは、その部分では有難いぐらい高市さんにめちゃくちゃ期待しています」

水島「ああ。でも本当にプラスに考えるっていうのは大事ですね」

フィフィ「ほんとですよ」

水島「まあ、ずうっと900回以上もやっているから、沢山の方が公明党の問題を言うけれども、まあ、ちょっと自慢で言うと、こういう言論界で公に公明党批判を最初にやったのは私です。みんな、ビビっていた」

フィフィ「ああ、本当…」

水島「でも言っても大丈夫だよと。まあ、フィフィさんは別かも分かんない（笑）」

フィフィ「いや、そんなことないです。私はテレビに出ている人間ですから、創価学会って言うだけでタブーでしたよ」

水島「そうでしょ」

フィフィ「だから、もう何されるか分かんないと思って、もう…」

石井「僕も自分が捉われていたんだなって思って、フィフィさんの今の話は目から鱗でした（笑）」

水島「いやいや」

石井「そうだなあと思って（笑）」

水島「実際、そうでした」

石井「その通り（笑）気持ちが大きくなりました」

フィフィ「私は何も怖くありませんから。うん」

石井「そうですよね。だから僕も怖いものが無いはずなのに、逆に何か変に自制していたんだなあって今、気づきました（笑）」

水島「いやいや、だから、そういう人が多いからいいんですよ」

フィフィ「テレビは創価学会とつるんでいる人達が多いですもんねえ」

石井「創価学会というより宗教についてコミットしちゃいけないという思い込みがあったのかなあって、今、自分で発見してしまいました（笑）」

水島「ああ、でもねえ、フィフィさんが言ったように、創価学会と統一教会っていうのは、自民党を右側から支えるのは統一教会、そして左からの感じで言うと…、この実力部隊が二つあって、これが動いていたから自民党は何とかなっていたけど、統一教会問題が出ちゃって、活動家達は別の政党へ行っちゃっていますから。

それから、私は元々映画監督で脚本家だったので知っていますけど、今、おっしゃるように創価学会は本当に芸能界に多いでしょ」

フィフィ「多いと思います」

水島「タレントさんも物凄く多い。だから、信者じゃなくても入らないと仕事来ない。でも学会に入れば色んな仕事が回って来る」

北村「マジですか」

水島「本当にそうです」

フィフィ「長井秀和さんって今、議員さんをされているじゃないですか。どういうことですかって聞いたんです。そうしたら入らないと仕事とれないうのもあるんですけど、今だと求心力が無いんですけど、例えばコンサートをやるとか、そういった時にチケットが売れ残ることが無いんですよ。主権者を動員して貰える、数でなんですけど、それも最近減って来ているから力は無くなって来てはいるんですけど、そういうことで、創価学会に誘われる方はいらっしゃいますっていうのは、長井秀和さんがおっしゃっていたんです。私は別に創価学会が凄く悪いとか云々かんぬん言っているんじゃないで、この政治の構図」

北村「そういうことですね」

フィフィ「普通は政教分離じゃないのって言って、それを言うとね、いつも信者の方が、いや、これは国会で認められているから解釈がおかしくないと言われたという、その時は自民党だから解釈がおかしいなんて出る訳が無いじゃないですか。おかしいなと」

水島「まあ、そういう意味でタレントの世界とか色んな所に入っていて、やはり、それがある種の利権に繋がっているしね」

フィフィ「うん」

水島「それが一種の、ジャニーズ事務所がある種の圧力団体。或いは、こっち系の方がプロダクションをやっている。それから学会の方が音楽では民音とか、ああいう形でやっている。実は、そういう芸能界の支配も結構あって、例えば一例を言っておくと、NHKも随分、入っていますから、NHKの朝ドラ、これを言うと失礼になるから言わないけど、朝ドラの主役の小さい頃の子役。生涯の話だから、高校生とか中学生だった頃を演じる子役さんっているじゃないですか。それを経験も何も無い子だけ創価高校の生徒だとか…」

北村「マジっすかっ」

水島「いや、マジって本当のことですよ」

フィフィ「北村先生の『マジっすかっ』（笑）」

水島「本当にマジですから」

フィフィ「何回、言うか『マジっすか』 1回目。ああ、3回ぐらい言ったかな（笑）」

水島「そういうことが現実には起きていたっていうことですね。だから、こういうベースが凄くあって、これからも利権として色んなことがあるでしょう。今度は、石平さんには是非、頑張って貰いたいけど、IRが今度、始まる。MGMとオリックスですよ。そうするとMGMって何かと言ったら映画会社。でも半分以上と言われるのが、噂にしておきますけど、ユダヤマフィアですから。世界で一番、強いマフィアですよ」

フィフィ「凄いなあ、水島さん、そういうことを（笑）」

水島「まあ、そういうようなところも、どんどんやる訳ですからね」

フィフィ「凄っ、普通だったら崩されますよ（笑）」

水島「私達は、こういうこと自体も踏まえて、これから日本の政治家達が、どれだけ苦労して頑張って貰わなきゃいけないと思います。では、モーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。有難うございます。正に公明党が連立から離脱したってということが移民問題のテーマに繋がっているなあと思っているのは、先程、創価学会とか統一教会、IRとかエンターテイメント業界とか色んなところで、外国の威嚇力というか力が潜んでいる。公明党が離脱したことは、もう大いに歓迎したいと思っています。もう外国の陰から離れた自民党が良い事を行ったなあと思うんですけど、そもそも自民党の連立相手は一つしか無い訳ですよ。それはCIAです。もう生まれた所からCIAがずうっと自民党を育ててきました。

その自民党の連立相手は他の党とはどうでもよくて、CIAですよ。ワシントンです。それでワシントンが自民党を傀儡して、70年間、ずう〜っと日本はワシントン・パワーの媒体として使われてきました。その自民党はワシントンから離脱する気が全く無い訳です。それが一番、基本的な問題だと思って、今日は、正に、その詳細について発表させて戴ければと思っています」

水島「はい。その中に移民問題は入っているっていうことですけど…」

モーガン「非常に深刻な移民問題はCIAです。日本ではCIAがやり放題、外国問題の中では一番、深刻な問題は正にそれです」

水島「はい、そうですね」

モーガン「はい、CIAです」

水島「はい。有難うございます。では河合さん、お願いします」

河合「はい。今回、公明離脱ということで、自民党にとってはプラスの面とマイナスの面があるんだろうなあと思っています。自民党にとってプラスなのは、やはり公明党と言うのは政教分離違反臭いと」

水島「うん」

河合「憲法20条違反っぽい、まあ、その主旨を没却する政党ですから、当然、イメージが悪いですし、所謂、ノンポリ層からはイメージが悪いし、そこと組んでいる自民党ということですね。これが今回、離脱するっていうことなので、高市さんも総理になれるんじゃないかというところで、保守のファンからしたら参政党や日本保守党さんに流れていた票が、また自民党の方に戻って来る可能性は充分にあるだろうということ…」

水島「それは流れるでしょうね」

河合「そういうことで、ここはプラスだろうと。まあ、シンプルにイメージアップという点ですね。逆にマイナスの点を言うと、やはり組むところが、これで非常に少なくなるというか、かなり選択肢が無いだろうなという風に思われます。当然、左派的な政党と組む訳にはいきませんし、維新と組むということも恐らくあり得ないでしょうし、参政党も、神谷さんが、はっきりと連立を組むことは無いってというようなことをおっしゃられたと思うんですが、そうすると組むところが中々無い。唯一、玉木さんとの国民民主は未だあり得

るのかなあとと思いますけれども、組むところはないということで、そうすると、やはり少数与党ということになるので、じゃあ、この状況だと解散総選挙はどうなるだろうと。勝てる見込みがあるのか、まあ、ある程度、今の自民党に比べたらイメージは良くなると思いますけれども、議席数を計算した時に組むところが中々無いという中で、解散総選挙が打てるんだらうかというところは、私も注目していきたいなと思っています」

水島「うん」

河合「はい」

水島「はい。有難うございます。まあ、これを議論すると2時間、3時間、直ぐ行っちゃうと思いますが、現実の問題と石さんがおっしゃったように、公明党が本当に現場で、ああだ、こうだとやっただけじゃないっていうのは、今の石平さんの鋭い指摘のように、もう前々からちゃんと予定していたっていうね」

石平「(頷く)」

水島「そういう中でセレモニーをやっていたんじゃないかと考えた方がね。というのは、国交大臣を何十年もやって来たとか、利権の構造が凄い。例えば、今、色んな所で北海道も自民党と公明党がつくった鈴木知事ですね。これも本当に…ああ、あとニトリという大きな会社は、もう中国の日本支局みたいなところですから、どんどん、こういうものを使って中国が単なる移民じゃなくて、そういう形で間接侵略みたいな形が現実に進んでいる。

そういう中で、もっと言うと、私は、中国共産党は今、もうポチポチ出た方がいいんじゃないのと、今が別れ時よというね、もう、ここまでグダグダにしちゃったからという、自民党がグダグダになったし、もっと言えば自民党が本来、持っていた保守系の思想とか、そういうのがねえ、公明党が入ることによってハッキリ言うと潰れたんじゃないかって。もうリベラルを取り込むと、前に安倍さんが秘書と横に居て私に言ったのは、右は大丈夫だからって、これから左のウイングを広げるんですよって。全然、そうじゃなかったんだけど、それを広げたくもりが公明党の連立で、もう政策自体がグローバリズムになっていったっていうのも、当然、そういうところがあるんですね。今、言ったように、中々凄と思うのは、やっぱり中国共産党の影響が公明党さんには凄くあるよと。その影響で彼らを見ていると、日本をどうしたいのかっていうのが少し見えて来るかも分かんないという感じもするんですね。

でも、今、急に、急にと言うか予想はしていたんですけど、こういう風になりましたので、実際、移民推進をしていた自民党執行部が、これで変わるのかっていうのは、北村さんがおっしゃったように、いい方向に行く可能性も本当はあると思うんですね。

ただ、今言ったように維新、そして国民民主、もう一つ、せっかくなので一応、言っておきますと、安住さんという立民の幹事長が政策毎に連合しようよと。だから、うちの野田さんが代表じゃなくていいから、玉木さんでも誰でもいい。こういう形で、公明も何も巻き込んでね、所謂、野党連合みたいなのをと。もう一つ彼が言っていることで非常に面白いと思ったのは、政策だけで連合しないかって言っているんですよ。

例えば、減税、そういうものとか、こういうものだけで、取り敢えず衆議院までは、そういう暫定内閣を創っちゃわないかと。こういうようなこともあるので、一応、この辺も、安住さんという人は、あの立民の中では大変、強かな政治家でね、こういうのもちょっと見ておかなきゃいけないというねえ、そういう意味では、こういう元気なお二人に登場して貰ったのは有難いですけど、どうですか。未だ始まったばかりですけど、議員になった感想はどうですか」

北村「まず立民が野党で政権を取ろうっていうのは、まず纏まらないと思います」

水島「うんうん」

北村「というのは立民が左過ぎて冗談じゃないよというのが、やっぱり国民さんにしても参政さんにしても、そういう意識が非常に強いと思います。だから、それに乗ってはいけないよねえっていうのが、まず一つ」

水島「なるほど」

北村「だから、それは多分、実現しないだろうなあと思っていますと」

水島「うん」

北村「やはり中国の狙いは、私から見ると中国は色々悩んだと思います。高市さんが総裁になった瞬間から、さて、どうしたもんかと。公明は今後も、ずっと政権の中に居て掻き回して欲しいのか、それとも出ることによって自民党を瓦解させたいのか、どっちかって中共は相当、悩んだと思います。その為に斎藤代表は何度も何度も、あの呉江浩（ごこう）さんですか」

石平「ああ、そうそう、そう」

北村「あのとんでもない駐日中国大使と何度も会って、作戦会議している様に外からは見えると」

水島「うん」

北村「結果、恐らく中共は、もう高市政権を阻むのも非常に難しいと。こうなったら公明党を引き剥がして、自民党の中から不満をぐわあ〜と出させて、つまり、さっきおっしゃった地方の衆議院議員の当選のパターンを見ていると、本当に公明の支持が無ければ当選できない人が、やっぱり相当、居るのは事実なのでね」

フィフィ「うん、居るんだよねえ」

北村「となれば不満がメチャクチャ出ますから、何をやってんの、お前のせいだろうという、その…」

フィフィ「恨み節でねえ、意地悪して来そう」

北村「そっちへ行くしかないのかなと思うと、どうしようもない」

フィフィ「うん」

北村「中共からしたら、やっぱりアメリカにトランプが居て日本に高市が居たら、もう、にっちもさっちも行かないと。中国は元々経済がめちゃくちゃになっているのでね。おまけに外でこれだったらどうしようもないということで、苦肉の策だろうなあっていう風に思っています」

水島「なるほど。それと、もう一つメディアが本当に報道していないんですけども、ガザの一時停戦」

フィフィ「そう、あったわ」

水島「ええ、ありましたね」

フィフィ「うん」

水島「これは非常に大事な話ですけど、これは象徴的だけど、これは世界的な話ですよ、本当は。あの反トランプだったABCとか、そういうメディアも実現したら、トランプは歴代の大統領の中で最高の大統領と評価されるんじゃないかとか、かなり、こういうことを言い出している。そしてガザの人達も相当、喜んでいる。それからハマスも、ちょっと私が読んだ報道によれば、ネタニヤフは信用できないけどトランプは信用できるって言うっているっていうね（笑）。

6万7千人も虐殺されているのを見た時、日本のメディアは虐殺の報道も殆ど無い訳ですよ。他の所のねえ、ああだ、こうだUSAIDが非難していたBBCとか、こういうところだって一応やっているのに、日本のメディアは本当に無かったです。これは、相

当に困っていると思いますけど、一応、ニュースで言いますと、トランプの停戦案の第1案、ある程度まで停戦して、イスラエル軍が後ろに下がって全部、撤兵じゃないですけどやる。

それから人質は全員というか死者も含めて返すというようなことですね。ハマスは、政治グループの中に一員として入る。但し武装解除の問題については未だ決まっていないというようなことで、大変、喜ばれているって言うんですけども、あのう…」

石平「ちょっと、さっきね、北村先生の話で、今、一つ思い当たったのは、昨日、高市さんが南モンゴルの集会に出て、何か中国の…」

フィフィ「出られましたね、何かメッセージを出していましたね」

石平「そこに憤りを感じるというメッセージを出したんですよ。あれねえ、恐らく中共に最後の決心をさせたね、あの最後の」

北村「激怒させましたね」

石平「そうそう、そうそう、そうそう」

北村「(笑)」

石平「だから、もう今日が、そういう結果ですわな。ただ協議事態は、もう、ただのセレブレーションで何の意味も無い。恐らく昨日の段階で中国共産党政権は、もう決断したはずですわな」

水島「そうですね。これは、皆さん、ご存じのように高市さんは前から、南モンゴルの援助団体の代表になっているんです」

石平「ああ、なるほど」

水島「それで、そのインタビューの中で『憤りを感じる』ということをね」

石平「憤りを感じると」

水島「よく、はっきり言ったなあと思って」

石平「そうそう、そう」

水島「総裁になってからね」

石平「柔らかい表現とか遺憾とか、何かそういうものを使わずに、非常に感情的に憤りを、恐らく習近平が逆に憤り、怒らせた。憤りさせたっていうような(笑)」

北村「そうそう、そう(笑)」

石平「そこで全て繋がるんですわ」

北村「繋がりますね」

水島「あそこですね、国家対策委員長になった、彼も台湾で交流を深めてやっているっていうね、こういうのも含めると両方共、一緒になっているんですね」

石平「そうそう、そうそう(失笑)」

水島「だから高市は駄目だというようなこと、もう、それと…」

北村「そういうことだったんですね」

水島「はい、そういうことになっていたんでしょうね」

石平「但し、これで中共も最後の切り札を切っちゃったんですわな。今後、どうなるか。彼達にとって一番、使い易い有効なる切り札も、もう、やっちゃったから」

水島「そうですね。ただ、それは、あまり党内事情でどうだっていうのを言ってもしょうがないかも分かりませんが、実は自民党の中に親中派と言われる人達がごまんという訳でね」

北村「めちゃくちゃ多いですからね」

水島「ええ、そうなんですよ(苦笑)。だから、そのことを見ておかないと、自民党はみんな、高市さんに付いているっていうことじゃなくて、足を引っ張りたい人が…」

北村「そうそう、そう（笑）」

フィフィ「あれは、ある意味、別に公明党が抜けたところで、中国の中では結構、繋がりというパイプは持っているから、浸透工作みたいなことは完了している訳ではないけど、結構、政治の中枢の中に入り込んで…」

水島「おっしゃるとおりです」

フィフィ「経済界の中にも入り込んで居て、メディアにも入り込んで居るでしょ」

水島「はい」

フィフィ「恐らくね。だって中国にネガティブな報道って聞かないですもん」

北村「殆どしないですからね」

フィフィ「うん。言ったら何か凄くピリつくみたいな感じで、あたしも、そういう感じの所で言って来ているから、出して貰えないんですけど（失笑）」

水島「いやいや、いや」

フィフィ「まあ、これで答ですよ。答なんです（笑）」

水島「個性でもあるけど、全然、目立っていない感じがしないからね」

フィフィ「ああ、そうですか」

水島「だから素晴らしいですよ」

フィフィ「ああ、いやあ、私はもう全然、怖くないですから。本当に怖くないです。もういいんです。私は言いたいことを言うと決めたので、何も怖くなくて、むしろね、こういう発言というのは、中国人の中に虐げられている人が居て、よく中国をそんなに嫌ってどうですかって言うけど、違う。中国の中に虐げられている人達が沢山、居て、その人達の為に、私達みたいに安全な場所から声を出せるので、私は間違っても中国には行きませんけどね。一発で捕まるのでね。北村先生も絶対に駄目ですよ。河合君も絶対、駄目よ。石平先生はどうですか」

石平「ここは、みんな、無理ですよ」

フィフィ「みんな、無理」

河合「私は、この間、一回、トランジットで…」

フィフィ「未だ今はでしょ」

河合「私、トランジットで行っちゃったんですね」

フィフィ「今度から、もう駄目だよ」

河合「もう、そろそろ駄目からも知れないです」

フィフィ「もうマークされていると思う」

河合「はい。ピー～ってやるので指紋を取られちゃったんです（笑）」

フィフィ「みんな、チャンネル桜に出た時点で、もう駄目」

河合「もう、駄目ですね」

水島「私も自慢じゃないけど、もう十何年前に暗殺者リストに立派に乗りましたって言われていますのでね、まあ、これはねえ、どういふか判りませんが、実際には昔、この話で岡崎久彦さんという大使、外交官で居て、この人が言っていましたけど、戦略対話をやったんですよ。日中戦略対話っていうことで、共産党の日本班の連中と、私もちょっと入れて貰ったんだけど、そういうので本当に喧々諤々というか、こういう議論をやった時、その中の日本班の女性の、まあ、勿論、諜報員ですけど、この人が、水島さん、中国共産党は日本で日中友好を言う人間達なんか全然、信じていないですよ。

逆にこれはお世辞でしょうけど、皆さんのように中国の政策に対して反対する人達の意見を聞きたいんですけどか言っているぐらいで、本当に、実は日中友好を言う人達は軽蔑していますっていう言い方で、まあ、その彼女は、ちょっと酔っぱらっていましたけど。そう

ということがあるんですね。フィフィさんにしろ、北村さんにしろ、しっかりと立派なことを言っている間は、発言している間は大丈夫ですよ」

北村「そんなことはないでしょう」

水島「いやいや、いや、本当に（苦笑）引退するとかってなるとね、危ないですから」

石平「そう、もう二人は引退してはならない」

水島「うん」

フィフィ「そうすると消えるの？」

石平「え？」

フィフィ「何処かに消えるの？」

石平「いやいや、いや、引退したらあかんっていう（笑）」

フィフィ「ああ、そういうことですか」

石平「言論活動を最後までやるっていうね」

フィフィ「消されると思った」

水島「脅かされ自慢をしてもしょうがないですけども（苦笑）、現実の問題として、今、中国っていうのは、それだけ浸透しているっていうことは間違いない事ですね。今、フィフィさんが言った指摘は、中国の自民党に対する工作が完了しているんじゃないかっていうね。それはあるから、逆に今回、公明党が出ようが出まいがっていうところもあるかも分かんない」

北村「完了と言うか十分に浸透したけれども、しかしトップがまた安倍さんのような人になったら、えらいこっちゃと」

水島「ああ、そりゃ、そうですね」

北村「安倍・トランプ時代の再来かと。何としても避けたいと」

水島「はい」

フィフィ「だってスパイ防止法が出来るかもしれないじゃないですか」

北村「もう日本に出来る可能性は充分ある」

フィフィ「ようやく国家反逆罪みたいなのか」

北村「ええ」

フィフィ「高市さんが言っていましたからね」

北村「ええ」

フィフィ「それを掲げていましたからね」

北村「高市さんがトップである以上は出来るかもしれない。80%なのでね」

フィフィ「私、期待しています」

北村「はい」

河合「公明党に関して思うのが、私は地方議員なので地方選挙ですから、一人当たり大体1500票とかで当選したとかするんですね。要は細かい所をやる選挙ですよ。この町内を抑えるとか、そういうレベル。それで公明党って、どういうことをやっているかって言うと、もうリストを完璧に持っている訳ですよ。だから僕は戸田市でトップ当選したんですけど、誰が入れているかっていうことは、さっぱり分からないんです。

約4千5百票ですけど、誰が入れてくれたか殆ど判らない。一人か二人ぐらいしか判らないと。公明党さんは1500票で当選します。その1500のリストを完璧に持っている訳ですよ。だから票の計算がめちゃくちゃ出来る訳です。それを合わせて国政とかもやる訳ですけど。だから本当に、下手したら数十票とかの単位で、完璧に計算が出来る訳ですよ。

だから自民党にとっては、その計算できる票が失われるというのは非常に痛い。今の中国

の話で言うと、その計算できる票を自民党から根こそぎ持って行ける訳ですよ。下手したら、そのリストも中国に渡っているんじゃないかと思っています」

フィフィ「(笑)」

河合「下手したら」

フィフィ「確かに」

河合「いや、それは本当に可能性としてありますよ。中国なんて情報を抜き取るのが仕事みたいな国ですから」

フィフィ「そうそう、そう」

北村「やりますからね」

河合「やるでしょ。完璧なリストを持っているんですから、私は、もう本当にビックリしましたよ」

石井「ところが、この前の埼玉の選挙を取材したんですけれども」

河合「はい」

石井「昼間、公明党の婦人部の人達が声援していたんですけど、20人ぐらいしか居なくなってショボいなあ、みんな、高齢化しているんだなあって隣を歩いていました、さっきフィフィさんがおっしゃったようにね。ヤジも激しかったので、埼玉の場合、前回の選挙の時に外国人問題がフィーバーしちゃったので、外国人の方には失礼ですけども、外国人を入れやがってえとか、普通のおじさんが騒いでいると。外国人には失礼ですが(失笑)」

フィフィ「いや、慣れていきますから」

石井「すみません(苦笑)」

フィフィ「むしろ私達も入れるな派で喋っているの、全然、はい」

石井「ああ、入れるなっていうのは、埼玉に入れるなっていうことですか」

フィフィ「いえいえ、もう政策として、ですね、はい。個人で来られる方はどうでもいいんですけどね」

石井「クルド人問題でフィーバーしているさいたま市南部だったんですね。だから、その魔力も大分、薄れているんだなあって、さっきの話に続くと、正に、その時代がもうじき来ていますね」

河合「それは公明党の議員さんでも言っていました。やっぱり、どんどん会員数が減って行ってね、所謂、高齢化していますから、まあ、亡くなられていきます。若い人をやっぱり加入させるのに営業が中々大変だということだね」

フィフィ「よくトップ当選したね」

河合「そうなんですよ」

フィフィ「何議席分、取ったんだっけ」

河合「僕は、まあ、一人で4議席分ぐらい取っていますね」

フィフィ「すごっ！」

水島「まあ、それだけ解っている人が出て来たってことですね」

河合「やっぱり埼玉県南部で、この外国人の問題を前面に出して、みんなが賛成してくれました」

フィフィ「外国人の問題を前面に出してね」

水島「そうだよなあ」

河合「はい」

水島「それと、具体的に言うと、これは宗教の専門家が言っていましたけど、公明党は、以前は大体700万票ぐらい取っていた。その内、実際に言うと、独りの熱心な創価学会

の人が少なくとも3人、入れていた。ということは何百万か減る。今、減っているんです。それから高齢化で若い人が今、あまり入らない訳ですよ。だから、高齢化の人達、お爺ちゃん、お婆ちゃんになって動きが、あっちへ行ったり、こっちへ行ったり、昔みたいに来なくなっている訳ですね。

奈良県で高市さんは、公明党の学会員の引っ越してきた人達の投票数で一回、落とされたじゃないですか。私はあれを覚えていますけど、アンケートで有利だって言われていた時に何があったかって言うと、前もって移住させてね」

フィフィ「ああ～」

水島「それで、その人達が熱心に頑張ってるね」

フィフィ「うわあ～」

水島「それで有利だって言われていた高市さんが一回、落ちたんですよ。だから、今ね、そういう南モンゴルもあるけども、そういう因縁が元々スタートで高市さんにあるっていうことでもありますね」

一同「ああ～」

フィフィ「へえ～」

水島「はい。というようなことで、もう一つ移民の問題に入る前に、丁度、ご出演されているフィフィさんはエジプトの方なのでね」

フィフィ「はい」

水島「この間、小池、緑の何とかが…」

フィフィ「小池さん、出すんですね。今、スペシャリストが二人、居ますね（笑）、デモにも参加していますから。はい」

水島「労働協約」

フィフィ「はい」

水島「というのがあってね、でも、実はカイロ大学を絶対に卒業していないんだけども」

フィフィ「そこまで言いますか（笑）、まあ、そうですね」

水島「ね。いや、外国で勉強した人が、もう100%、あんな姿勢でエジプトの、まあ、一応、ナンバーワンの大学とか他の大学でもそうだけど…」

フィフィ「エジプトだけじゃないです。あのカイロ大学は、アラブとアフリカでナンバーワンの大学です。ええ」

水島「そういう大学を…」

フィフィ「彼女は首席でと言った訳ですよ」

北村「最初はね」

フィフィ「最初はね。いつの間に消えていますけど」

水島「だからね、外国で学んだ人は100%、みんな、あり得ない」

フィフィ「あり得ないって言っています」

水島「だから、そういうことを言うのはあるんだけども、今回のエジプトの労働協約、実は、私がこの間、言っているんですけども、実はパレスチナの和平で、現実にパレスチナ人をシナイ半島へ連れて来て、そこへ住まわせようという…」

フィフィ「ええ」

水島「あのイスラエルのがあったじゃないですか。でも、それと、実はパレスチナの人達を…」

フィフィ「ああ、

水島「今度、日本にね」

フィフィ「ワンクッションして日本に連れてくる可能性があるっていうことですか」

水島「そういうこと。あの緑のあれはやりそうな感じがあるんじゃないか」

フィフィ「緑のあれ（笑）」

北村「緑の狸のことですか」

水島「そうですねえ」

一同「（笑）」

北村「ああ」

フィフィ「赤いきつねと緑のためぎのことですか。どっち派ですか」

一同「（笑）」

石井「緑の小池ですね」

一同「（笑）」

フィフィ「ああ、小池ですか。じゃあ、買わなくちゃ、違う、全然違う、そっちじゃない」

水島「まあ、そういうことも含めて異常に繋がった移民が、単なる国内問題じゃなくて、世界的な形で日本に、所謂、輸出じゃないけども、仕事しているんじゃないかということがあるんですけど、皆さん、少し移民に絞らせて貰っていいですか。その中で、他の事も言って載っていいんですけど、パレスチナの問題で言うと、さっき言ったようにトランプが言ったのは、自分が移民を統治する。他の人達を色々な場所に移動させる。これはトランプの案だったんですね。

そういう意味で今回の場合は、第一の和平の停戦が、少なくとも停戦が済んだってということですけど、こういう人達がエジプトにワンクッションおいて日本に来るかも分かんないということ、或いは、もっと言えば、台湾が今、問題になっていて頼總統という人が必死になって、防衛を5%にしますとね。というのは、一番、感じているのはトランプが台湾を捨てるんじゃないかっていうことです。クールに、クールにというかね。そうなると、今、誰からも助けが来ない訳ですよ。日本なんか口だけは運命共同体って言っているけども、全然、やる気がない。具体的には何もやるつもりがない。台湾が、そういう状態に追い込まれているというね。

そういうことを考えると、大量に台湾の人達、民主派って言うかね、あの人達も日本に来るしか無いんですよ。まあ、アメリカへ行くとかね。こういうようなことがあると、本当に移民というのが具体的な形で、必要なものとして言われるようになってくるといようなことがあるんでね。

それは日本が本当に移民というものを、どういう風に考えるか。やはり、これは根本的なところから考えなきゃいけない。因みに私は、あとで困るので自分で言っておきますと、5%でも10%でも駄目だと思います。基本的には入れない。必要な人以外は入れない。こういうようなことを、ちゃんと言わないと、シンガポールが図々しく言うんですよ。景気の良い時は入れるんだと。でも景気が悪くなったら、みんな、帰しちゃうんだって。人権なんか関係無いと、シンガポールのリー・クアンユー（李光耀 - Lee Kuan Yew）らしいんですけども昔、言っていた。

でも、そこまでいなくても、こういう移民の問題というのは、人間の問題としてもね、考えなきゃいけないという気がしているんですけど、まず、この基本的な姿勢、まあ、私は、ある程度、解っているんですけども、お話し戴けるかなと思います。じゃあ、今回は逆から、いいですか」

河合「はい。この移民の問題というのは色々な論点があるんですけども、私は、埼玉県南部で活動していますから、やっぱり一番、問題になっているのがクルド人の問題です」

水島「うん」

河合「要するにクルド人の問題というのはイコール不法移民。要は、これね、話を分けなきゃいけないと思っています。所謂、合法的に居る外国人を増やすかどうか。まあ、これは労働者の話とも、かなり関連して来る話ですけども、私が言っているのは、まず不法移民の話です。要は滞在資格のない外国人です。クルド人の殆どが嘘の難民申請をして、要はトルコで迫害もされていないし、内戦も無い。凄く平和です。私は現にイスタンブールに行きました。もう物凄く平和です。現地のクルド人も言っていました。そんな、内戦なんか無いよ、無いよって。難民なんか嘘だよって現地の人達が言っていたんです。その動画も出しています。

それが日本に出稼ぎで、お金儲けたいから来る訳ですよ。川口でクルド人がおいで、おいで、こっちはいいよおって、解体業をやったら儲かるよおと言って呼んでいる。こういった法の抜け道、難民申請の抜け道を使って来ているという、これが非常に問題点としてあるというところで、これは本当に早く強制退去させないといけない。これは予算を沢山、付けて入国警備官を増やすなりして、国会議員の皆さんに政府のお尻を叩いて戴いてやって戴きたい。

それで、また難民申請も期間がね、クルド人が難民申請しまあ～すって言ってから、結果が出るのに2年半もかかるんです。それでね、入国の話は、仕事をしている人も知り合いが居るんですよ。彼ら言うてましたもん。私らも直ぐ帰したらいいと。こいつ、嘘なの解っていると。そやけど魔法の言葉を言われるって言うんですよ。I' m a refugeeと言われたの。私は難民でえ～すって魔法の言葉を言われたら、もうお手上げですと。要はその難民申請の2年半かかる、このルートに乗せなきゃいけない。これは、もうクルド人は解ってやっていますから、この問題を解決しなきゃいけないというのが、まず1点、ありますと」

水島「はい」

河合「もう1点は、合法的な外国人を次にどうするんですか。合法的な外国人を増やすんですか、減らすんですかっていう話がある訳ですよ。これの問題というのは、経済の問題もあるので非常に難しいですね。要は外国人の労働者、まあ、人口不足と言われている中、外国人で埋めて行くのかっていう論点がある訳ですね。この合法的な外国人に関しては、経済の問題と、もう一つは治安の話があると思っています。

どっちの面から論じて行くのかです。私は、この問題を、もう直ぐに治安の面から言っています。私は、合法的な外国人であっても、埼玉県南部で増やしたくないです。それは何故かということ、不法移民以外の合法的な外国人も合法的な外国人だけでも、当然、日本人に比べて国民性として申し訳ないけど悪い。これは現実ですと。

世界の各国のデータを見て下さい。殺人率のデータを見て下さい。日本と比べて、一桁も二桁、違いますよと。そんな人達を合法だからって沢山、入れたら間違い無く治安が悪くなりますよ。こういう面を言っています。

もう一つは経済の問題。これをどうしよう。人材不足と言われている中、どうやって外国人を補完、指揮して、いいバランスで進めて行くのか。この辺りは論点だなあと思っています」

水島「はい。そうですね。特に外国人でも、所謂、肉体労働者というか単純労働の人達と、また高度な技能を持った、この辺は違うところがあるんですね。それと、青山学院大学の福井義高さんという教授は、私はかなり立派な男だと思っています。この人の調査が正論という雑誌に2回に渡って掲載されましたけど、外国人は日本の労働者の賃金を上げないとか、職を奪うだけじゃない。それだけじゃなくて、実は、途上国の外国の人が一人、入って来ると、基本的に7千万から1億円、個人インフラ。病気もするし、学校も必

要だし、トイレも行くし、電気も使うし、こういう何年っていうことじゃないけど、オランダのあるシンクタンクが詳細に出しているんですね」

北村「2016年ですね」

水島「はい、そうですね。ああ、もうご存じですね。そういうことを含めると、単なる労働力不足だから入れていいのか。つまり国民にその負担、一人当たり7千万なので100万人を入れると、つまり、どういうことかと言うと70兆円ぐらいかかるということになるそうです。滞在年数は別ですよ。20年、30年、日本に居る。だから、やっぱり、ある意味で言うと、単純にどんどん入れりゃあいいって話ではないということ、文化的な摩擦で不幸になるとか、そういうことじゃなくて、それもあるけれども経済面でも、おっしゃるように両面、あるっていうねえ」

河合「うん」

水島「それで企業がそれを負担しないんですよ」

河合「うん…」

水島「お前ら、自分でやるんだから自分で個人インフラを負担しろという風に言いたいけど、それは無いと。現状ではそういうことだそうです。じゃあ、モーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。この移民問題は、この間、吉野先生が番組に出られたかと思いますが」

水島「はい」

モーガン「理想的な数はゼロ人だと。私も全く同感です。ゼロ人が正解です。先程、ガザ地区の言葉がちょっと出たんですけども、構造的に移民とは何かって、歴史を俯瞰して考えないといけません。500年間、白人が非白人を殺戮してきました。あのガザ地区の方々に何処かに移動してくれって、逆にジェノサイドをやっているシオニストに何処かに移動してくれと誰も言わない」

フィフィ「ほんと、それ」

モーガン「何故ですか」

フィフィ「同じ意見を言ってくれてありがとうございます（笑）。こういう方がいらっしゃるんですね」

モーガン「ジェノサイドをやっている人に対して、何処かに行ってくれじゃなくて、ジェノサイドされている側に、お前達、何処かへ行って下さいって、それ自体がおかしいですよ。おかしい。でもアメリカでは、その様な話が通りますし、日本のエリート、所謂、名譽白人の中では、あっ、そうですねってワンクッションで日本に来てくれるとか。でも80年前まで、同じワシントンが日本人に対してジェノサイドやっていました」

水島「うん」

モーガン「じゃあ、セットになって便利じゃないですか」

水島「うん」

モーガン「そもそも上の人々が下の人々に何処か行ってってくれって、それ自体が駄目だと思います。今の日本国内の移民問題で、日本国民の存在はゼロですよ」

水島「うん」

モーガン「日本国民の意見はどうなったんですか。埼玉県川口市の方々の意見はどうでもいいような感じで、上の人々が決めて」

フィフィ「そうなの」

モーガン「ね。お前達が苦しめばいいと。失礼ですけども、石井先生のこの御本を拝読させて戴いて、ページをめくる度に、ここまでかって本当に怒っているんですよ」

石井「有難うございます（笑）」

モーガン「警察も動かないし。失礼ですけれども、石井さんが色々指摘されて、脅迫されたら引っ越せば良いと。警察が石井先生に対しておっしゃったようです」

水島「うん」

モーガン「何、それ。日本国民を守ろうとしないで、上の人々が自分のポジションを守って、下の人々が苦しめばいいと」

水島「うん」

モーガン「それは日本国内で大きなパターンで言うと、世界レベルでそういう構図が日本国内で、ただ複写されただけ」

フィフィ「うん」

モーガン「上の人々が決めて、じゃあ、お前達が苦しめばいいとか、それ自体がおかしいので、それに対してはNOと、はっきり言わなければならないと思います。日本国民が、上のエリートを全く信頼できないので、じゃあ、自分達の自らの手で自分達の共同体を守るしかない、私は思います」

水島「うん」

モーガン「その歴史的な500年間で出来た構図自体が芯まで腐敗して、目の前の人間が苦しんでいること自体が無視されていて、おかしいと思います。そこから考えないと駄目だと思います」

水島「そうですね。はい、有難うございます」

モーガン「あっ、あと、もう一つ、ごめんなさい。もう1点、ごめんなさい。労働問題とか、何故、日本国民の数が足りない。近くに国際連合とか大学があるじゃないですか。あの児童基金とか人口基金とか、あのグローバリストが80年間、この日本国内で人口削減を図って来て、水島社長もおっしゃったように1億人ぐらいが多分、中絶で水子に。1億人ですよ。尊い日本人の命1億人が亡くなった。それはグローバリストがやった」

水島「はい、戦後ですから」

モーガン「戦後ですよ」

水島「1億1千万と言う人も居ます」

モーガン「今更、お前達に言われたくないですよ。人口が足りないとか。何とかしようとか。お前達が日本人の尊い命を奪った上で、誰か外国から入れましょうとか、もう、その構図自体がおかしい。人の命はどうでもいいと思っている」

フィフィ「凄いな、もう」

モーガン「あの連中とは、もう付き合いたくないと思います」

水島「そうですね。はい。アメリカでは墮胎とか色んな問題が言われていますけど」

モーガン「はい」

水島「現実には、これは今、戦後の水子は1億1千万って言われています。こういう運動に反対している人達も居て、スキャナーで観られるような、あのう、まあ…」

モーガン「超音波ですか」

水島「ああ、そう」

モーガン「はい」

水島「超音波で見せて貰いましたが、本当に見るに堪えない」

フィフィ「そうですね」

水島「中に棒を突っ込んで突き殺すんですよ」

フィフィ「はい」

水島「可哀相に赤ん坊が逃げるんですよ。ねえ、もう聞くだけでもつらい話です」

モーガン「はい」

水島「それを放送してくれって私に頼んで来たので、これは本当に凄い映像だけどね」

モーガン「はい」

水島「申し訳ないけど、これは勘弁してくれないかって言ってね、ただ実情は、そういう風に話すからって言ってね」

モーガン「そう」

水島「そのぐらいねえ、実際、色んな事情があるからね、全部が病気とかね、色んな事、それでなくても母体が死んじゃうとか色んなことがあるなら、仕方がないけれどもねえ、本当にそれは簡単にやっちゃいけないことだっていうね」

モーガン「日本国内では国連が素晴らしいとかね、国連万歳と言っている人は馬鹿過ぎるですよ」

水島「うん」

モーガン「あの奴らが中国でも同じこと、強制的な中絶とかね」

石平「うんうん」

モーガン「強制的な不妊手術とか」

石平「(頷く)」

モーガン「インドでもやったし、非白人が赤ちゃんを産まないように、この80年間、ずっとやって来ました」

水島「そうですね」

モーガン「あの優生学者は」

水島「そうですね」

モーガン「だから人が居ないんですよ。それでジェノサイドをやっている奴らが、こいつらは、もう困っているから、じゃあ、何処かに移動してくれって、もう、どれだけサイコパスに支配されているか考えると本当に怖いですよ」

水島「その通りですね。はい、有難うございます。フィフィさん、お願いします」

フィフィ「いや、モーガンさんの話も水島社長の話もそうですけど、パレスチナの現状と重ねて、この今の移民の話をしたのは凄く新鮮でした」

水島「うん」

フィフィ「ただ、そのワンクッション、例えば、置いて、もしかしたらエジプトに入れるはずの難民を日本に受け入れるんじゃないか。まあ、そういうことは、はっきり判らないですけど、だって、今、東京都は中味の詳細を明らかにしていませんから」

水島「そうですね」

フィフィ「何人を受け入れるのか。何処から受け入れるのか、どういった人達を受け入れるのか一切、詳細が無い訳ですよ。アフリカ・ホームタウンのと違って。うん」

水島「それとエボラ出血熱、新宿に研究所を造る訳ですよ」

フィフィ「うん。そういうのとかね。だって、今後、アフリカを受け入れるからね」

水島「そうですね」

フィフィ「エジプトは北アフリカなので、ガッツリ・アフリカとは、ちょっと違う環境ではあるし、価値観も違うんですけども、あとは、モーガンさんがおっしゃったパレスチナと照らし合わせると、入植者の問題ですね。要するにシオニストが入植して来て、本来は、ここが批判されなきゃいけないのに、シオニストがメディアを全部、握っていたから、例えばシンドラーのリストとかね、映画の賞を取るんだけど、じゃあ、ガザの悲劇とか、ヨルダンの悲劇とか、そういうのは一切、報道しない。報じられなかった何十年があるので、いきなり日本の方で、パッとガザの話をする、ハマスがいきなり爆発したように思われるけど、いや違うんだと。

これは明日の日本と照らし合わせて見ると、入植者がどんどん入り込んで、いつかバンと爆発したら爆発した方が悪いんだって、今、正に川口で起きているような事ですよ。勝手に入れておいて、怒ってワァ～って騒いだら、この人達、お行儀が悪いよねとか、そういうことを言われているのが、今のパレスチナというのは、今後、あらゆる国で起きることの縮図であると、私は考えています」

水島「うん」

フィフィ「その時に、じゃあ、例えば日本がパレスチナの難民を受け入れる必要があるのか。義理があるのかって言うと、そもそも日本が起こした問題では無いんですね」

水島「うん」

フィフィ「そして、今、北アフリカの人達が、例えば、ボートピープルで難民なんかでヨーロッパに行きますよね。あれも別にワンクッション入れてじゃないけど、アフリカからの人達を、日本は先進国だから責任として呼び寄せる義理も無いんですね。だって歴史的に、あの国々が暗黒の時代と言うか、貧しく虐げられたのは日本のせいでは無いですか」

水島「そうです」

フィフィ「そりゃあ、ヨーロッパは、ある程度、そういう風に言われるのは仕方がないけれど、日本は全く関係ない。でも今後、入れようとしているのは、エジプトがそうだけど、もっとヤバイのはナイジェリアだとかアフリカでもガッツリ・アフリカ。日本人は、アフリカで何をしているんですか。あとはイスラムの国々。パキスタンとかバングラディシュとか、あとはインド。インドには行ったんでしょ」

河合「勿論」

フィフィ「インドはどうでした」

河合「いや、もう今迄、行った中で、僕としては一番、最悪の国だったですよ」

一同「(笑)」

フィフィ「環境と価値観が違い過ぎるもんね」

河合「本当に。インドって、結構、日本人のイメージが割といいと思うんですよ。カレーとかね、何かITの先進国とか思っていると思うんですよ。ところが本当はインドのね、エリート層だけです。もうムチャクチャ貧しい国で、殆どの人が腕を切られているとか足を切られているし、物乞いして来いってヤクザに言われている。そういう人が一番、多いのが、私はインドでした。だから南アジアとアフリカが、この世界の中で一番、最低だと、私は思っています」

一同「(笑)」

フィフィ「失礼かもしれないけど、現実でそういう所から来るの。それでね、じゃあ、今、イスラムの問題が起きているじゃないですか。あたしはイスラムのバックグラウンドがありますよ。でも何が問題になっているかって言うと、5万人ぐらいのイスラム教徒が居るのかな。その内、結婚されてとかで日本人も居ますけれども、改宗されて居ますけれども、殆どがパキスタンですよ」

水島「ああ」

フィフィ「世界の4人に一人がイスラム教徒ですからね、そうすると、勿論、ヨーロッパにも居るしアメリカにも居るし中国にもイスラム教徒っている訳ですね。回教徒っていわれる。ただ、例えばインドネシア、マレーシア、今、受け入れている人達も居るじゃない。介護や保育だとかで。だけどパキスタンってイスラムの考え方がめちゃくちゃ極端ですよ。そういう人達が恐らく昔からイスラム教徒って居るけれども、最近、問題になっている、土葬やれえ～とか、ハラールを用意しろお～とか礼拝所をつくれえ～って言ってい

るのは、大体、パキスタンですよ」

石井「そうですね」

フィフィ「この背景には、また背後にあるのが中国ですね。パキスタンと中国は、めちゃくちゃ仲が良いので、何を考えて、突然来て、あんなふうに町を練り歩いてね、私達はモハマッドのあれだあ～とか言ってやっているんですけど、私達イスラム教徒は、まず布教活動をしてはいけないうってなっているんです。別に実践できなければ、あと、実践する必要が無ければ、だってコーランって昔と同じようなこと、新約聖書、旧約聖書みたいに新しく書き換えることがないので、昔と一緒に解釈を変えるとか生き方によって、それぞれの価値観で信仰するんですよ。自分を解放させるようにね。

それなのに自分を窮屈に追い込むっておかしいじゃない。むしろ相手を追い込むなんて、おかしな話で、これを実践しているのがパキスタンですけど、突然、こういう話を聞いた訳です。パキスタンも昔から解体業で居たんですよ。でも突然、大騒ぎし出したので、ちょっと、あとで石平さんにも聞きたいのは、何かパキスタンと背後に中国がいつも居るから。何かあるのではないか。この話っていうのはね、結構、グローバルで考えると陰謀論みたいに言われるかもしれないけど、さっきから言っているパレスチナの話もそうだけど、何か日本に対して戦略があるとか、工作みたいなのが働いているのではないかと考えちゃうぐらいおかしいです」

水島「今、そういう問題で言うと、何故、今、言ったような結構、厄介な人達と言われているパキスタンの人や、ナイジェリアって、中央アフリカでは最悪と言うかね」

フィフィ「渡航危険レベルで凄く高いですよ。そうそう、そう」

水島「かつてビアフラの、とかね…、もう部族同士が虐殺が繰り返されている。あの狭い所に2億人も居るっていうね。それから地下資源も凄くから大変ですよ。そういう一番、強かな人達が木更津にやって来ようとしていたと。まあ、今、やめになったって言っていますけど。だから文化的な摩擦という問題も考えなきゃいけないと思いますよ。

さっき言ったお金の問題で言うと、イスラムの方は給食で豚肉を食べませんからね。こういうようなことを含めると、学校も、この間、埼玉の県議の…」

石井「今、パキスタンの人達が埼玉の北部に集中していて、イスラムのハラル食の給食を主張しているのもパキスタンとクルドですよ」

フィフィ「うん」

石井「特殊な人達だなあというのが、本当にそれで解ります。今の話は新鮮で、欧米で起きているのは、ある程度の人が固まるとコミュニティが出来て、コミュニティがばあ～と呼び始めるので、欧米のは、ぼお～んと撥ねる時があるんですけど。僕はパキスタンってそれだと思っていたんです」

フィフィ「(頷く)」

石井「もしかしたら陰謀があるかもしれないなっていうのは、ちょっと、そこから先は、僕のジャーナリストの世界じゃないですけども、示唆されましたね。面白いなあと思いました。あっ、おもしろくはないですけども」

フィフィ「うん」

石井「あり得る話だなあと思いました」

水島「やっぱり、それだけ生きることを生身の命懸けでやって来た人達というようなことを含めて、その違いというのを見ないといけない。もっと言うと、私はさっき言ったパレスチナを観てね、イスラエルのネタニヤフ政権は6万7千人を虐殺しても、自分達の命を守る為だったら仕方がない。そういう敵は殺してもいいというね、こういう価値観を持っている人達が世界にちゃんと存在しているっていうことを、我々は見なきゃいけない。

今、チラッとやってくれたけど、中国が本気でやるとしたら、同じことをやると思いますよ。何故かと言ったら、今、Japan's Holocaust というキャンペーンが始まっていて、これをずう～っとやっている訳で、南京写真館、731をいう映画を作り始めているんです。それが大ヒットしている。だから、今、私は南京の3作目の映画を創ろうとしていて、今、やっていますけれども、本当に今のガザの悲劇というのは、中国もやっていいと、自分達はこれだけやられたんだと。3千万人も殺されたんだから、少しぐらい返してやってもいいはずだという言い分は本当にあると思いますよ。復讐をしっかりとやるっていうね。

前に石平さんと雑談した時、水島さん、中国共産党の本音はね、とにかく一回は、日本人を、こっぴどく痛い目に遭わさなきゃいけないと」

石平「(頷く)」

水島「こういうのがベースにありますよってというのは、ああ、さすがだと思ってね、そのことも本当にあるんでね。フィフティさんが言うのは結構、リアリティのある話で、これは殆どパキスタンの人が多いですか」

フィフティ「今、イスラム教徒の殆どはパキスタンが多いですね。勿論、コミュニティも出来上がっているし、何故か、どういうビザで来ているのか判らないけど、私達からすると、所謂、原理主義っていう表現がどうなのか判らないけど、本来、そういうものは無い訳ですけど、要は、凄い髭を蓄えた様な、ああいうのは現地でも中々、例えばエジプトとかでも見ないような、ああいうタイプの方が、普通にパキスタンの衣装のまま、帽子もかぶって礼拝所の前も行ったたり来たりして、礼拝所に入りきらないとか時間が無いからって道で集団礼拝するとか、本来は、ああいう見せつける必要が無い訳ですね」

水島「ああ、なるほどね」

フィフティ「家の中でするものですから。だから、おかしいですよ」

水島「普通、そうだよ」

石井「調べると、東京都は公表していないですけども、ベンチャー企業の支援金で外国人が使っているというので、内訳、パキスタンの解体業とパキスタンの中古車販売業じゃないかっていう説がありまして(笑)、調べたら公開してくれなかったんですね」

水島「ああ、でも、それは都から支援金があるんだよね」

石井「都からの支援金…」

フィフティ「私は今日…」

水島「あれは確か何百万円でしょ」

石井「はい」

水島「ね」

石井「それを何故か東京に会社がなくて、ヤードを持っているのは埼玉県で、という噂があったんですけど、東京都は開示してくれなかったんですよ」

フィフティ「今日ですねえ、私、たまたまDMで、これ、どうなっているんですかって言って来て、愛知県だったんですけど、私も元々住んでいたのが愛知県出身ですけど、見たら愛知県がムスリムの方限定で、もっと来て戴きましょうということで…」

石井「ああ、そんなのがあるんですか、私、調べてみますわ」

フィフティ「そういうキャンペーンが今、出ている、私のXで、ついさっき来る前に投稿したんですが」

石井「あとで調べてみます。うん」

フィフティ「県知事は大村さんじゃないですか」

石井「ああ…」

フィフィ「中国とベッタリの。何を考えているんでしょうか（苦笑）」

北村「大村さんらしいですね」

水島「大村さん、そうですね」

フィフィ「なんでっ！」

北村「メチャクチャらしいよ」

フィフィ「そっちらしいって言うことなんですね。赤いらしいって（笑）」

水島「いや、大村って有名ですよ」

フィフィ「何故、一宗教の、あたしもムスリムですが、ムスリム・フレンドリーやるって、観光なんかの会社とかが、そういったものをどんどん推進するとか、自分らで、ハラールを何かメニューに増やしておこうとかか解ります、インドネシアの方とかも居るから。それで税金を使ってムスリムだけって言うと、他の宗教の人って、普通、そこまで宗教に肩入れするのっておかしくないですか。そっちは、らしいですよ（笑）」

北村「らしい」

石井「らしいって言うか、らしいんですけど（笑）」

フィフィ「名古屋市も、らし過ぎます」

石井「あとで、その辺を調べてみます」

フィフィ「でも、あっちは全部、赤いらしい」

石井「ただね、不気味なお金の使い方と公金チューチューって話題になりましたけども、変なお金の流れ方で、外国人がたっぷり享受しているってことは確かだと思います」

水島「だからねえ、日本人で、それを仲介する奴が居るんですよ」

石井「はい」

水島「だから本当にねえ、その問題、いや、万博とかも今回、黒字、黒字って言っているけど、あれは人件費とあれだけでね」

石井「そりゃあ（笑）」

水島「それで浮いただけで、あの1兆3千億円の使ったお金は殆ど赤字ですよ。投資したもののついては何も黒字になってない。こういうものは開示されていない。それで今、やたらにトラブルが起きているでしょ。あの未払いの何だかとかね。とにかく公金をチューチューするというねえ、あまりにも多過ぎるっていう気がしますよね」

北村「しかし開示しないっていうのは、本当に緑の狸らしいですね」

石井「そうですね。開示っていうのは取材だったからかもしれない。ガッチリやれば出来るのかもしれないですけどね」

北村「都議会でも結構、答弁を拒否していますよ」

石井「ああ、そうですね。そうかもしれない」

水島「東京都って、実は決算を出していないですよ」

石井「ああ、そうなんですか」

水島「真面な決算が無いですよ」

石井「予算規模は8兆円ぐらいあるんですよ」

水島「いやいや9兆円」

石井「9兆円ですか」

水島「だって普通の国、中進国だったら一国の予算ぐらいある」

石井「うん」

水島「これぐらいやっていないから、昔から伏魔殿って言われたんだけどねえ、緑のオバサンになってから本当にねえ…」

フィフィ「（笑）」

水島「あれ、大変ですよ」

北村「緑のオバサンは酷いですよ」

フィフィ「怒られますよ（笑）」

北村「え？変なこと言った？」

フィフィ「だって緑のオバサンって言ったら駄目。狸ならいいの」

北村「狸ならいいの。なんで狸ならオッケーなの？」

河合「緑のオバサンって」

フィフィ「狸なら狸って」

北村「ああ、じゃあ、狸に言い換えます」

水島「確かに前に私、言われたことがあるんです。大嘘つきが居ただけ、これ、大嘘つき野郎って言ったら裁判官に、水島さん、大嘘つきと言われていると言うならオッケーだけ、北村さんは弁護士さんだから一番、解るだろうけど、大嘘野郎と言ったら名誉棄損なんだと」

フィフィ「人間になっちゃう」

水島「そう。ああ、緑のオバサンって駄目なのか」

フィフィ「解らないけど（笑）」

水島「これは勉強したなあ。謝罪して訂正はしませんけど。まあ、でも…」

北村「私は狸に訂正します」

フィフィ「狸に言って（笑）」

水島「まあ、それはいいですけども。今、そういう問題がありますか」

石井「じゃあ、結論を、ちょっと短くやっちゃおうかなあって感じですね。これは、埼玉クルド人問題を見て、僕が考えた事ですけども」

水島「はい」

石井「まず外国人労働者と不法滞在者を分けなくちゃいけません。国を開くか閉じるかって、日本の場合は、恐ろしい事に未だ国民は一度として決定していないんですよ」

水島「はい」

石井「管理された移民制度、誰もが求めているようなことには、着地すると思うんです。例えば知的労働者の方とかなら全くウェルカムですよ。日本は誰も排斥するなんて言っていない。但し左派政党は今、いきなり同じ権利を与えろと言っていますが、それはやめさせましょう」

水島「うん」

石井「方針の明確化をしないといけないんですけど、今迄、自民党はダラダラと20年間、決めてあったんですね。外国人政策基本法はあってもいいと、僕は思いますが、どういう方向で外国人と共生するかっていう話が日本には無いですね。受け入れる場合、クルド人問題を見て、よく判ったんですけど、数量を管理しないと絶対に駄目ですね。3千人のクルド人しか管理できない。この万人を入れちゃって、調べようと思ったんですけど、今度、86万人を入れようとして計画しているんですよ」

水島「そうですね」

石井「26年度にスタートする特定技能第2号ってあるので、82万人という見積もりを出しているんですが、82万が家族を呼べるので、直ぐに400万人とか500万人になりますから、それは絶対にやめさせなくちゃいけない。とにかく高市さんが、これを止めないと本当にヤバイと思います。数が増えると、不法滞在者、犯罪者が増えます。さっき言った話ですけど、利益を得る人を明確にして、受益者負担を求めなくちゃいけません。不法就労者と犯罪者を利用する日本人が悪いんですよ。外国人労働者の不法労働者って、

限定しますけれども、外国人への課税、雇用者の課税もクルド人の場合は殆どされていませんでした。雇用者が利益を得る人から負担を求め、これはシンガポールが制度にしています。必要があれば雇用を日本人に置き換える政策をする。これは外国人の方には申し訳ないですけれども、これを考えなくちゃいけない。

外国人労働者、人権配慮っていうことで、日本政府は外国人を、ただ働かせる労働力としてしか見ていない恐ろしい発想を本当にしているんですよ」

フィフィ「そうそう、そう」

石井「これは絶対に許されませんよ」

フィフィ「うん」

石井「それで制度の中で、彼らが幸福を追求できる仕組みを入れないと、絶対に駄目ですし、これは外国人の方に対して失礼ですよ」

水島「うん」

石井「治安、町づくり、社会保障、教育、年金など問題が多岐に渡っているのに、なあ～んにもしていないですね。労働力としてしか見ていないので、政策を絶対に替えなくちゃいけない。それで日本の社会の一体感の維持。これは同一文化、社会に常に残さないといけないと思うんですね。

シャルル・ド・ゴールというフランスの有名な政治家の言葉を最後に、私の発言を最後に残しておこうと思います。彼が1960年に大統領に就任した時に言ったらしいですね。

『黄色いフランス人、黒いフランス人、褐色のフランス人が居れば、それは素晴らしい事であり、私は歓迎する。それはフランスが人種に関係なく、権利と人権を認めている事になると証明するからだ。それはフランスの道義的正当性を高めることになる。但し、その数がほんの少数に過ぎない場合に限られる。さもないとフランスはフランスで無くなる』と言ったんです。

これは正に、さすがだと思ったんですね。今のフランスの惨状とか西欧の惨状を見ると、いかに警告が受け入れられていないかっていうことが本当に分かります。外国人の方には、申し訳ないですけれども、日本の一体性とか継承っていうのは絶対に残す。一体感っていうのは残さなくちゃいけないと思います」

水島「うん」

石井「もし、この国に入って戴く方には、それを認めて戴いて入ることを誰も否定していないです」

水島「うん」

石井「その中で考えなくちゃいけないのにも拘わらず、日本の今の政策をなあなあでやっているから、ダラダラと何も誰も決めないでやっていて…」

水島「うん」

石井「問題が噴出しているから、外国人も日本人も不幸になっているんですね」

水島「うん」

石井「僕は煽るなって言っているんですけども、一つの例として、今、ネットで広がった映像を見せます。これは埼玉県民が作ったものです。ちょっとセンセーショナルで申し訳ないですけれども、埼玉県民の不安っていうのは実際に起きている事で、クルド人がたむろすることによって女の人が恐怖感を感じているんですね。これが大炎上と言うか大拡散されていて、ハンドルネームでXさんという方が数百万ずつ、僕が広げたら増えて、X上で閲覧されてしまいました。

今、川口でアンケートを取ったら、川口市の女性の7割から8割が恐怖感と不安感を感じていると回答したそうです。これは社会がおかしくなっているんですね」

水島「そりゃそうですよ、うん」

石井「それは石井がつくったデマだとか言うんですけれども、そうじゃあないでしょうと。ここまで来た以上は、みんなが感じている訳で、社会が壊れている一番、始まりが日本で始まったんじゃないかっていうのがあるので、絶対に治安というのは、まず、第一の問題にしくちやいけないし、長期的な課題と短期的な課題っていうのは分けて欲しいなと本当に思いますね」

水島「そうですねえ」

石井「すみません。手短かに」

フィフィ「河合さんも結構、言われなかった？煽っているとかめっちゃ言われていたじゃない」

河合「勿論、僕は…」

石井「実は短い報道で言いましょうか。短期で今、やらなくちゃいけないっていう話がありまして、日本って積極的な外国人問題についての広報って、議論を全くしていないんですよ。日本人ファーストでいいではないかと。これは排外主義の意味ではなくて、国家の根本である、さっきの本を引用して戴きましたけど、国民の生活防衛とか治安というのが、国の政策で考えるとダイバーシティとか何もやっていないんですよ。厳格な法執行を行って下さいと。因みに私への殺害脅迫者は釈放され、不起訴ですね。こんなの日本ではあり得ないでしょう。この問題を巡る無駄な争いは停止して下さいと。

声を挙げる風潮、石井への嫌がらせ、民事脅迫訴訟、右も左も止めて下さい。河合さんには実は面と向かって批判していますが、河合さんは現地で、ちょっと煽り過ぎのような気がします（失笑）。怒りは解りますけれども、社会運動としての価値は認めますけれども、争いは誰も望んでいないですね。あと、差別、排外主義というのは、日本で煽り過ぎちゃった僕が言うのも申し訳ないですけども、これは絶対に止めなくちゃいけないし、日本で内部から腐らせるっていう問題が今、出ている…」

フィフィ「あ、でも河合さんの場合って現地で煽っているんじゃないかと、行くと…」

河合「あのねえ、私は邪魔をされるんです」

フィフィ「あっちが来るんだね。全国から来るんだ」

河合「左派の方が暴動を起こしているんです」

石井「それは認めますけど」

フィフィ「うん」

河合「そう、私は…」

フィフィ「だって、当然の権利として…」

石井「申し訳ないけど、河合さんがセンセーショナルに煽っている部分があると思いますよ」

河合「まあ…」

フィフィ「いや、だって現実に、そこに現場に行っちゃうから、狙われたり、あとは左派の人達に絡まれたりするよね。私も現場に行っているんで解りますけど」

石井「僕、見ましたし、実際、それなりに脅迫されていますから」

フィフィ「どうだった？」

河合「だから、勿論、私も殺害予告も来るしね、この1年、街頭演説も真面に出来た事って、ほぼ無いですから」

石井「ああ、そうなんですか」

河合「いやいや、だって、毎回、左派が、シバキ隊達 comes からですからね、だから、まあ、私が煽っているというか…」

フィフィ「でも、実際、これで注目されたのは本当だもんね」

河合「そうそう、そう。だから、まあ、ある意味、逆手に取っている部分もあるんですけど、ただ、私は普通に街頭演説しますって言ってやったら、もう何十人も左翼、シバキ隊が来る、共産党員が来る。それで話題になっちゃっているってことでね、まあ、煽るというか、まあまあ、まあ匂わせていますけど」

水島「あのねえ、そういう人が必要なんだよ」

河合「うん、そう」

フィフィ「そう、クローズアップさせる為にはね」

水島「言わないと駄目でね。そのシバキ隊で、私は大阪で耳をおかしくされましたから」

河合「そうですねえ」

水島「私にもヘイトスピーチやっているって、別に移民の問題で極当たり前の話をしているだけだけでも、とにかく帰れ、帰れと、レイシスト、レイシスト、それをマイクというカスピーカーを6つ揃えて、私の5メートルぐらい前でやるから…」

フィフィ「凄いのよ」

水島「耳が完璧にいつてしまっで耳鼻科に行きましたけど、大分、難聴になりました。実は、今、少し難聴です。まだ2週間半ぐらい前ですけどね。だから、こういうようなことを今、シバキ隊はやるんだけど、こんな連中を好きにやらせて引っ込んでいたら駄目だからね」

河合「そうです」

水島「やるならやってみろっていうことをね。ただ、もう一つ言えるのは、日本人の側で言うとな、私は前に仲間のウイグルから亡命して日本に来て帰化した方で、グリスタン・エズズさんっていう女性が居るんだけど、この人は選挙に出て貰ったんですよ。そうしたら日本人の側から三世代あとでないと選挙権を与えるとかね、馬鹿じゃないのと。お前からより、よっぽど彼女の方が日本を愛しているぞっていうようなことがあるので、だから、本当にねえ、石平さんだって、もう何年も凄く長い時間、日本でやっているのに未だ悪口を言う奴だって居る訳でしょ。

だからねえ、こういうことは、やっぱり、もう少し、ああいうシバキ隊とか、こういう意識的にやる人達に対して、こちらがきちっと断固とした態度をとらないと、本当に駄目だということかねえ」

河合「だから、これで、ある程度、私の活動も含めて、参政党さんとか日本保守党さんとか各党で、かなり世論を作れて来ていると思っでいて、だから、そういう意味で私は大事だと思っでいるんですよ。まあ、ある意味、煽るっていう言い方は悪いですけど…」

水島「いや、挑発する必要はないけどね」

河合「そうそう。ないけれども、それは現実で起こっていることなので、世論作りっていうのは大事ですと。恐らく私は90年代の東西冷戦が終わって、世界が全体的に We are the World 的な、どっちかって言うと、みんな、仲良くしましよっでっていう流れが、この20年ぐらい、ずっとあつたと思うんです。

そうすると、所謂、日本人ファーストとかって言うと、言っちゃいけないことを言っでいるみたいな流れが変に出来ちゃっているので、それを、やっぱり変えなきゃいけないってことで、私達とか保守派の人が活動してですな…」

水島「そうだね」

河合「この1年で、かなり大きく変わったなと思うので、これはいいことだと、私は思っでいるんですよ」

水島「うん」

石井「ちなみに、これを短く申し上げると、僕だけの議論をやって申し訳ないですけど、最後に埼玉クルド人問題は声が挙がって変わったってことを指摘したいと思います。報道開始、最初は黙殺されたんです。正にチャンネル桜をお願いして出して貰って、チャンネル桜の視聴者と水島さんに助けて戴いたっていうのがあるんですけど、今、クルド人が違法外国人問題の象徴になった訳ですね」

水島「殺すって言われたんだもんね」

石井「そうです。国民の声は政治を動かしているんですよ。さっき言ったように否定はしていないんですが、派手なことはやめて下さいというのは、僕の繰り返し（苦笑）」

水島「いや、それとねえ…」

石井「朝日新聞なんかもクルド人問題について発言しなくなったんですね」

水島「そうですね」

北村「発言しなくなったんですか」

石井「そうです」

北村「いいことですねえ」

石井「いいことですね」

一同「(笑)」

水島「いや、だからね…」

石井「ただ東京新聞だけが発狂しているんですけども、毎日新聞。左派の攻撃に、国民世論がわあ〜となったんですね」

水島「うん」

石井「打ち勝ったんですよ。ただ、声を挙げた人には嫌がらせが続いていると」

水島「まあ、石井さんだから言い難いから言いますが、埼玉の自民党の議員がね、根性がないんでね」

石井「うん」

水島「みんながわあ〜となったら、今頃になって、やっと、あの新藤義孝にしろ、何にしろね…」

石井「そうそう、そうそう」

水島「あいつだって、ちゃんと尖閣に一緒に行っているんですよ。こういうのに…」

石井「新藤さん、逃げちゃいましたから」

水島「こうなると、いざとなると、そういう場になると何も言わないでね、やっと…」

石井「動き始めました（笑）」

水島「動き始めますって、一回、動いただけだけどね」

石井「最近、もう少し動き始めました。はい」

水島「だから本当は自民党がきちっと、こういう線をねえ…」

石井「やってないからです。だらしがありません」

水島「それと、どうですか、モーガンさんと話したけど、この人間の見方」

モーガン「はい」

水島「何か、こうヘイトスピーチだ何だって振り分けてね、いや、お前らこそ多文化共生が出来ない奴じゃないのかって言ってね（失笑）、人の意見を全部、潰すっていうのはね、多文化共生なんてあり得ないだろうと」

石井「ただ、ここから埼玉の世論が味方だったから、ハッキリ言って河合さんもそうですよ。7500票も取っちゃった訳ですから」

水島「これ、ある意味で言うと嬉しい事だよ」

河合「(頷く)」

石井「だから、それがあると、彼らも言えなくなって、まあ、私は攻撃されていますし、訴訟も喰らっているんですけども、実は5連発、刑事告訴されて、4連発は不起訴になったんですけども（笑）、何の意味があったんだっていう感じですが」

水島「嫌がらせですよ（失笑）」

石井「はい。地域住民から治安改善の声が少しずつ出ていて、もう行政が本当に鈍いんです。だから、県は未だ動いていないですけど、少しだけ動いたっていう評価があって」

水島「う～ん」

石井「問題は未だ解決していないんですけど、半歩、動いたっていう感じですね。クルド問題をきっかけに、全国で違法外国人問題がおかしいっていう声が挙がって、僕のせいじゃないですけど」

水島「う～ん」

石井「石井さんがおかしいっていうことで、おかしいって言っているんだって埼玉の人が気づいたと言ったんですね。今、多分、そうだったんですよ」

北村「そうそう。うん」

石井「外国人が悪い事をしているって言うことが。ただ、1点、懸念点があって、外国人排斥の動きも出ているんですね。ムスリム・フォビアという言葉があるように、地域騒乱の強まり、左と右。まあ、河合先生のせいでは無いんですけど、騒乱も起きていると。実は、秋葉原モスク問題っていうのも今、起きていてですね…」

水島「いや、だから、その騒乱が起きているとか、そういうのは…」

石井「秋葉原で、隣なので秋葉原じゃないです、隣に御徒町っていうのがあるんですね」

一同「うん、はい」

石井「そこに大きいムスリムのビルが建ちます。モスクですけど、その秋葉原で、イスラムが侵入してきたんだって騒いだ人が居まして、残念ながら政治家も居ました。そうすると、ちょっとデマっぽくなっちゃってですね」

水島「いや、だから、それは逆に向こう側の人ですよ」

石井「実は、某保守系の団体の方ですけども、ショック受けちゃいました」

水島「ああ」

石井「その人、真面な人だと思っていたので」

水島「うん。いや、あれは単純に考えて、馬鹿だから、それをやっただけでしょ。一番、問題なのは、さっきのあいつらみたいに多文化共生を言いながらね」

石井「うん」

水島「人の意見を封殺するみたいなね」

石井「そうですね」

水島「同じようにねえ」

石井「隙を見せちゃっているというか…」

水島「知性が低すぎるって言うか、物を考えない人ばかりじゃないかっていうねえ」

石井「これは、その団体は、ただの新しい所の建て替えです。ただ、その団体も広報しているのは悪いと思うんですけども、それでモスクが今、攻撃されていて混乱が起きているんです」

水島「それは良くないよなあ」

石井「韓国で今、1年ぐらい前から騒ぎになったのがテールっていう、韓国で、ちょっと保守的なところがあるんですね」

水島「うん」

石井「そこで住民が大騒ぎして、豚肉のバーベキューとかをやったことが世界的に報道さ

れて、韓国が大笑いされたことがあるんですね」

水島「いや、そういう利用をされるからね」

石井「いや、同じ料理人が、そう、そうやってね、あつちは左派も強いから左派が拡散して」

水島「だからね、団体っていうか、元の在特会の連中が、それは一部の奴でしたよ」

石井「うん」

水島「でも、あの時、国連の人権委員会に持って行かれて証拠にされたのが、朝鮮人はゴキブリだとかね」

石井「そうそう、そうそう。うん」

水島「豚だとか。海に叩き込めだとかね」

石井「それで川崎の、正に社長が懸念して抗議して…、それで変な条例が出来ちゃって…」

水島「そう。だから彼らに言ったのはね、犯罪者を外国へ出て行けっていうのはいいけども、例えば朝鮮人一般も出て行けとかね」

石井「そうそう」

水島「ゴキブリだあ、豚だの何だとかね、そういうことを言うから、それは利用されるよと言った通り、見事に利用されて、結局、ヘイトスピーチ法が出来ちゃったんですよ」

石井「う～ん」

水島「でも、あれは西田昌司と2時間ぐらい凄い議論をしたんだけど、あの人は今、どう思っているのかねえ、うん」

石井「これ、フィフィさんに失礼かもしれないけど、だからムスリム攻撃にならないように呼びかけているんですが、ちょっと力を、僕の力なんて限定的ですし、それで社会が逆の方向にヒートアップしちゃっているようなことは怖いなあと思っていますね」

水島「いや、だから、そのパレスチナの問題も二つあるんですよ。人間の見方として、例えば、こういう言い方をする人も居る訳ですよ。いいシオニストみたいな、酷いユダヤ人と良心的なユダヤ人が居る。こういうふうに分けて、だからテルアビブで反戦デモが起きているだろうという言い方をする。

でも、もう一つは、ユダヤの学者さんですけど、やっぱり、これは宗教的に異教徒、安全を守る為には全部、やってもいい。例えばLGBTで言えばね、ソドムとゴモラみたいな熱線で全員を殺してもいいみたいな教えがあるから、こういうものを現代で、どうやって折り合いをつけるかを考えなきゃいけない。

だから、単にいいクルドの人も居るんですよ。罪を犯すと。あの中学生をレイプしたクルド人は悪い奴だけど、大部分のクルド人は、みんな、善い人ですってね。それは違うだろうというようなことがあるからね」

フィフィ「でも私達は昔から四十何年、日本に住んでいる訳ですけど、ムスリムからしたら良いか悪いかは別として、このムスリムの国じゃない国、日本という国でイスラム教を強引に実践しようとしてモスクを建てるという活動で、どんどんモスクを建てていくとか、それはきりがありません。人数で言っても、今度どんどん入れて来るんですよ。そういう国から。日本は、人材が安い国からブルーカラーを入れて来て、しかも、申し訳ないですけど識字率も非常に低く、本当にコーランをちゃんと解釈しているのかっていうのが、よく解らん人で親から教えて貰って、女性はこうするんだ、ヒジャブしなきゃいけないんだって、ここでヒジャブする必要は無いんですけどもね」

水島「うん」

フィフィ「だって道だって歩けるから別に何か襲われる所ではないから、アフガニスタン

みたいに戦争している訳でもないし、だから、そういった国で、自分達が親から教えられただけで、コーランを読んでもいない、しかもコーランってアラビア語で書いてあるので、恐らくパキスタンの人達って殆ど読めないはずですよ」

水島「ああ」

フィフィ「しかも高度な人じゃないと読めてないし、ちゃんとしたオリジナルなんて読めていない。だから申し訳ないですけど、フィフィさんにはって言うけど、フィフィからしても申し訳ないけど、別に強引に、この国でムスリムを推している人達は、ちょっと申し訳ないけど、ごめんね、他の国へ行って下さいと。他にも中東のUAEとかサウジアラビアとか、いくらでも人手不足の所はあるし、そんなに徹底してやりたいって言うんだったら、その世俗主義、あたし達は世俗主義って言われるところですけど、そういう所じゃないイスラム教の国っていうのがあるんですよ。法律自体がイスラム教になっている国があるので…」

水島「ああ、そうだね、信仰しているからね」

フィフィ「はい。そういった産油国は非常に人手不足なので、そっちへ行けばいいと思います。この国、日本ではイスラムに慣れてもいないし関係ないし…、イスラムって、そもそも別にモスクでお祈りしなくても、方角を定めて祈ればいい訳です。例えば旅行者だっただけで来ているじゃないですか。毎日、毎日、インドネシアからも来ているし、中東からも来ています。そうすると、どっちの方向でお祈りしたらいいですかとか、あっちから日が出ますかって、ホテルの方に聞くと、ああ、あっちからですよと言って、部屋でお祈りをするんですよ。別に他人から見えていない所で」

水島「確かにやっている人はやっていますよね」

フィフィ「布が無ければ、何か敷いて部屋で出来るものです」

水島「そうですね」

フィフィ「別に他人の国に来て、モスクが無いと祈れない訳ではありません。そんなものが無ければ実践できないっていう方がおかしいですよ。心と心で繋がっているの。あと、ハラル・フード、ハラル給食に関しても、私も昔から日本の公立学校に行きました」

水島「うん」

フィフィ「給食のメニューを見ると、今日はポークが入っている」

水島「うん」

フィフィ「ここに豚肉のハムが入っている、そうしたら、小さいタッパーで別のおかずを持って行くんですよ。みんなが対応していました。だから何故、そんなにゴリゴリ押してくるんだと思うと…」

水島「ああ、そうだね、凄くね、うん」

フィフィ「この国をめっちゃめっちゃ根本から変えたいという団体が、一緒になって何かしているのか」

水島「うん、うんうん、うん」

フィフィ「非常に不自然だし、突然、こういう声が、何故か世界でグローバルリストが出て来て、やれ、多様性だあ、LGBTだあなんて言って価値観を、みんな、世界一緒にするんだみたいな時にグチャグチャにして、こういう風になった時、日本でも同じような問題が出て来た時に、私からしたら、お願いだから、あんた達、よく解らない変な団体、ムスリムだあ～とか言って練り歩いているような団体とか、そこら辺で集団礼拝。黙って思っているんですよ。

私達が築いてきた共生共存が、全部、彼らにチャラにされて、ぶっ壊されて、逆に私達が凄い偏見の目で見られるので、黙って。お祈りしたいんだったら、自分の家でやっ

て、おとなしく」

水島「うんうん」

フィフィ「それが出来ないんだったら、中東へ行きなさいって思うんです。産油国へでも。自分の国から出るなって、それだけの話です」

水島「いや、本当に」

フィフィ「ごもつともでしょう。おかしいです。それは何処の国でもです」

水島「うん」

フィフィ「別にイスラムの話に限ったことではありません。もう郷に入っては郷に従って貰わないと困ります」

水島「そうだよねえ」

石平「いやいや、今、フィフィさんがおっしゃっていることは、正に外国人問題の本質がここにあるんです。もし外国人が日本にやって来て、フィフィさんの様に、郷に入れば郷に従えというね、日本の価値観も、ある程度、受け入れて溶け込めるならば、本来の外国人問題も生じて来ないんです。正にそういう外国人問題が、それ程、大きくなったのは、やっぱり一部の外国人が集団でやって来て…」

フィフィ「図々しいですね」

石平「自分達が日本のものを受けるところか、自分達の価値観を日本に押し付けるっていう、そこが、もうどうにもならない。特に宗教。今、フィフィさんがおっしゃった宗教の問題が特にそうですよ。日本は昔から多神教であって、宗教は非常に寛容ですわ。別に仏教がやって来てから、神道が仏教を排除することもしないです。でも一部の宗教は、自分達の独善的な考え方で、日本社会に強要するということが、大きな問題として必ず起きて来るんです。いわゆる文化の衝突が日本の中で起きてしまうというような、かなり深刻な問題ですわ」

水島「うん」

石平「要するに、僕は別の番組で言ったことがあります、みんなが笑ってしまうんです。本来ならば郷に入っては郷に従え、だから、それは正しいですけど、今、一部の外国人がやっている事は、要するに郷に入れば、郷が俺に従えというね（笑）」

一同「（笑）」

フィフィ「ほんと、ほんと」

石平「それが駄目ですわな、うん」

モーガン「でも問題は、それが多分、アメリカからすると、それが当然なことだと上から目線で、日本に対してお説教することが、もう自然的な姿勢で、例えば、飛行機から降りて間も無く、もう既に日本にアドバイスを言っているアメリカ人が、あまりにも多過ぎて…」

北村「（笑）」

フィフィ「そういうことね。アメリカ人はそういうところある（苦笑）」

モーガン「もう、最初のね、最初の5分ですよ。この地を踏んでから、こうすれば良いとかと上から目線で、先程、おっしゃった入植問題とか植民地問題は、正にその通りですよ。他の人の国に入って上から支配して、こうやれとか、ああやれとかって、それがあの連中の基本的な考え方で、それが一番、問題だと思います」

水島「そうですね」

モーガン「正直なところ、長年、カトリックの信者だった私が、カトリック教会から離れた理由の一つがLGBT問題です、あまりにも児童性虐待が酷過ぎて、そういうことをやっているのであれば組織として、もう関わりたくない」

水島「うん」

モーガン「あと、もう一つは、一般の信者の口から何回も聞いたことがあるんですけども、日本側が駄目だとか、これは駄目だとか天皇陛下は悪魔崇拝をやっているとか、神道は悪魔崇拝なんだとか、徹底的に日本という国を否定する訳です。押し付けるところもあるし、そうやって今、フィフィがおっしゃった事は、私も全く同感です。日本って何故、日本かって言うと、他の国と違って独特な文化があるからです。そもそも異文化共生はあり得ないじゃないですか。

一つの文化に同化するか、または別の所に住むか、そのどっちかと選んで、でも日本は、もう、とてもいい国があるから、せっかく日本があるから、ここに来て台無しにしないで戴きたいと。もし他の文化がいいと思ったら、アメリカにせよ、イスラムにせよ、他の国に行きなさいと」

フィフィ「ほんと、そうですよ」

モーガン「この日本って日本人ファーストって当然過ぎない？当然じゃないですか。縄文時代から日本人が、この日本を創って来た」

水島「うん」

モーガン「じゃあ誰の国かと言うと、日本人でしょう。そうすると。その独特な文化があって、もし、それを尊重することが出来なければ、帰れ」

一同「(笑)」

フィフィ「静かに言いましたね(笑)」

河合「日本人は、やっぱり国民性が優しいっていうのがあって、やっぱり特種な島国なので、やはり大陸は戦いの歴史ですから、自己主張が激しい。アメリカ人だけじゃなくて中国人も、本当に自己主張が激しいから、ここの日本人の国民性で何かやられちゃうみたいな感じだと思うんですよ。埼玉でもね、ちょっとクルドの話で補足すると、最新情報で言うと、大分、クルド人の問題は、実は、ちょっと解決に向かっていてっていうのがあるんですよ」

北村「そうなんですか」

河合「ええ。いや、勿論、完全に解決はしていませんよ。私は入管の現場の人の話を聞いていることもあるんですけど、かなり予算を付けて結構、強制連行しているっていう噂を聞くんです。だからボスのマヒルちゃんがね、強制退去させられてとか、現に私は蕨でしょっちゅう活動をしていますけど、あまり居ないんです。大分、少なくなっているんです。あのパラスチオの前ね、あのパチンコ屋の前とかセブンイレブンの前でいつもおったあいつらが毎日、酒盛りをしていたのが最近、見なくなっているんです。

だから、まあ、勿論、言われているから、今だけ影を潜めてっていうこともあるかもしれないけれども、大分、クルド人がマシになっているんです。一方、その蕨の隣の西川口。ここは中国人のエリアです。むしろ私はクルド人問題以上に、ここが埼玉の一番の癌だと思っていて、クルド人は高々居ても3千人ぐらいですから、まだ知れていると。もうね、その隣の西川口、ここが中国人、ベトナム人の巣窟ですよ。要は、彼らが、もう我が物顔ですね。自分の町にしちゃっているんですよ。もう完全なチャイナタウン。

だって日本人は自分達の土地なので、川口と戸田の所に西川口ってあるんですけど、自分達の土地なんだけれども、中国人の方が我が物顔になっちゃっている訳ですよ。これは、まあ、本当に色んな話を聞くんですけど、もう本当に中華料理屋に行っちゃ駄目だよということを、市民の人から聞くんですよ。それで何故ですかって言ったら、出しちゃいけないもの出していますよと。これは噂レベルで、本当かどうか判らないですよ。東京湾の牡蠣を密漁して出したりしているから」

フィフィ「ああ、でも、それはやっているよ」

河合「そうでしょ」

フィフィ「やっていますよね」

河合「聞きますよね」

フィフィ「うん」

河合「聞きますよね。これは結構、本当の話で」

フィフィ「私、以前、取材しているよ」

石井「正に全然、同意ですけど、今、左派の人達とか普通の人が、エキゾチックだから面白って西川口が逆に観光地になっちゃっているんですね（笑）。ガチ中華っていう言葉が東京にあるんです」

フィフィ「一緒に行ったよねえ」

河合「行きました」

フィフィ「取材で見に行ったよねえ」

河合「それでね、あそこはチャイナドラゴンっていう中国マフィアが居るとも言われていて…」

水島「まあ、居るでしょう」

河合「そこが裏で手を引いている、そういう飲食店とかが密漁しているという話もあるし、あとチャイナドラゴンの手を引いている不動産屋さんというのもあるって、そこがバツカバカ中国人を入れているっていう話もあるって、だから中国人だらけになっている。で、我が物顔です。日本人の方が歩きづらくなっているというのが、現状なので…」

石井「ああ、実は中国人って賢いから、ああ、お話中に、ごめんなさい」

河合「どうぞ、どうぞ」

石井「日本人には手出ししないんですよ。クルド人と違って眼も付けて来ないんですよ。それが全く文化の違いかなあっていうか、賢さを逆に感じます」

河合「まあ、そうですね。クルド人に比べたら知能の高さは感じますね（笑）。これ、言ったらアカンですけど（笑）」

石井「（笑）ちょっと追加ですけど」

フィフィ「はいはい」

石井「これ、広報されていないんですけど、実は、クルド人問題は、あまり改善してなくて減ったっていうはずですけども、6か月で60人減りましたね」

河合「うん」

石井「減ったって言われているんですけど、実は広報されていないんですよ。片山さつき事務所から貰ってきまして、細かい話になるんですけども、つまり減った減ったって噂で出ていたんですけども、あまり数が減っていない」

水島「60人ぐらいしか減っていないっていうことですね」

石井「そうです。実は、ようやく2年間、出して来たんですけど、川口市から他の所に広がっているのと、千人程、捕捉できないトルコ人の存在を認めていて、未だに数が判らないそうですね。7割が偽装難民という、やはり特種な人達だになっていうことが、この数字で判ったのと、あと雑談ですけど140人の日本人の配偶者が居るんだと。これだけ評判が悪い…」

フィフィ「ああ、あたし、これねえ、もう直ぐ出るから、今日、途中から出ちゃうから話したかったことが、一点だけあったんですよ」

水島「ああ、どうぞ、言って下さい」

フィフィ「実は、その配偶者の話。何か色々治安が悪くなるとか、あと、さっき言った宗

教の違いとか、ああいう問題とか課題は多いねっていう中で全然、話し合われていない点
が一個だけあって、それは、所謂、配偶者、彼らは日本に滞在したい訳ですから、どんな
手でも使って滞在しようと思うから、割と結構、昔からあったんです。日本の女の子とか
に好きだ、素敵だねって言って、ほら、レディファーストとか慣れていなかったりする
と、そうやって言われて、ときめいちゃう女の子も居て、それで結婚する訳ですけど、結
婚する時もね、安易に結婚しちゃって、じゃあ、彼の価値観や、どういう経緯で来たの
か、どういう人なのか、どういう立場の人間なのか、蓋を開いたら不法滞在者だったとか
オーバーステイの人間だったとか、あとは、それこそ宗教の問題だとか、そもそもブルー
カラーで来ていたりするから、メチャメチャ価値観が違う。教養がないとか。
家族も何か凄く女性を弾圧するような人だったと言って、メチャメチャ虐げられているん
ですけど、問題になりましたと、私、名古屋に家族と住んでいましたから、うちにメチャ
クチャ、1年に何回ぐらいか相談が来るんですよ。あとは、更に言えば向こうでは結婚し
ていたと。実は、彼は結婚しているのに、日本で婚姻」

水島「ああ、重婚か」

フィフィ「そう、私も結婚していて、だから重婚していたんだとか、そんなケースは珍
しくなかったけど、今後、メチャメチャ増えると思います。そこだけは未だ話し合ってい
ないっていうか、課題で出て来ないけど、メチャメチャ増えると思います」

水島「そうですね」

石井「私も2件、人生相談が何故か来たんですけれども（笑）、親切に答えてあげて、家族
会議に出席しました」

フィフィ「そういうのですよね」

石井「女性は色々複雑ですね。これは実刑の問題で、あまり言えないですけども、だか
ら正にそういう人達も含めて…」

フィフィ「昔、男性側もあったんでしょ。例えばフィリピンとかロシア系の女の子達ね
え、向こうの人が滞在したいからくつつくというの」

石井「だけどもムスリムは女性しか居ないですね。日本の場合です」

フィフィ「ああ、そうそう、そうそう」

石井「ムスリムの女性が日本人と結婚するというのは、クルドでもパキスタンでも聞いた
ことがないです」

フィフィ「ああ、ないですね。男性が日本の女性と結婚して、蓋を開いたら変な人だった
みたいなのはありますよ」

水島「うん。だから、そこですね。そうになると、もう、ずうっと帰って貰う訳にはいかな
くなるしね」

石井「そうです」

水島「それで子供もできるしね」

石井「ああ。ただね、日本政府もこの2～3年、あまり出さなくなったそうですね、配偶
者ビザについて。だから怪しいと思うんですけど」

水島「だから、まずはあれだよ、その難民になる立場を入り口の所でね」

石井「すみません、お喋りをして」

水島「つまりトルコではそういうのは無いっていうね、そんな2年もやったら。それから
前に聞いたんですけど、月に手当が出るんでしょ」

石井「月に手当が出ない場合と出る場合と、難民申請は確か1日千円ぐらいの食費が出ま
すね」

フィフィ「申請している間も出るんですか」

石井「そうです」

フィフィ「申請している間にですか」

石井「申請している間」

フィフィ「面倒臭いなあ」

石井「第一回目の判定まで出ると聞いています。だからクルド人の場合は、もう自分で働きに行っちゃうから（笑）、全然、やっていない。守っていないと思います（笑）」

フィフィ「働き者の方だね」

水島「はい」

石井「すみません、細かい話ばかりして」

水島「ということで、そろそろフィフィさん、色々…」

フィフィ「そうなんです」

水島「今日は残念ですけど、抜けなきゃいけないので」

フィフィ「そう。私、途中で抜けちゃいますよお」

水島「はい。最後に一言、あったら言って下さい」

フィフィ「私、45分ぐらいまではいいって言ったのに追い出されましたね」

水島「いやいや、違う、違う、違う（苦笑）」

一同「（笑）」

フィフィ「え？」

水島「何かあったら言って下さい。あと数分、ありますから」

フィフィ「本当に今日は有難うございました」

水島「いやいや、大変、素晴らしい話を」

フィフィ「ええ。このあとも、私は移動中でも生配信を観ますので」

水島「はい」

フィフィ「皆様も盛り上げて下さい」

水島「どうも有難うございました」

石井「有難うございます」

フィフィ「何かナイスパも色々載っていますね。素晴らしいですね。私も皆さんの反応、を見ていますので」

水島「はい」

フィフィ「今日は先に出ますけれども、私も観ながら参加しまあ～す。さようなら」

水島「はい、有難うございました」

フィフィ「すみませんね。私は凄く沢山、喋ったんでねえ」

石井「面白かったです」

フィフィ「満足しました」

水島「いやいや、はい」

フィフィ「失礼します」

水島「はい、有難うございます（笑）。さあ、北村さん、今、皆さんに色々お話を戴いたんですけど、纏める訳じゃないけど、どうですか」

北村「ええ、ええ、纏めるつもりじゃないんですけど、自分の考えを申し上げますね」

水島「はい」

北村「結論から申し上げますと、ああ、その前に、お詫びをしておきますね、緑のオバサンと言ったのは訂正してお詫びして、緑の狸さんにしておきます」

一同「（笑）」

フィフィ「気にしちゃって（笑）」

水島「じゃあ、私も合わせて、そうしておきます、はい（笑）」

北村「それで、私の結論を最初に申し上げますと、日本語を学んで、日本の文化を尊重して、法秩序を守って、そして勤勉で生活力のある善良な外国人以外は共生出来ませんと。これが、まず結論だと」

水島「素晴らしいねえ」

北村「皆さんのおっしゃっていたことも、全部、理由ですけど、さっき、水島さんがおっしゃっていた福井義高さんですかね」

水島「はい」

北村「ええ。私も彼の論考を見て大変、感動しまして」

水島「いいですよねえ」

北村「それをご紹介したいと思います。ちょっと、うろ覚えなので、さっきメモしたんですけど、間違っていたらごめんなさい」

水島「はい」

北村「まず、2016年にオランダが政府の調査として、非常に緻密な調査を始めましたと。何かと言うと、移民を一人受け入れることを一つの投資と捉えて、つまり入って来たら生活保障とか社会保障とか医療とか色々な投資をすることになるので、じゃあリターンはどうかということのを緻密に検討して分析しましたと。分析している内に、どうも拙い結果が出そうになったので、これをやめて民間に移しましたと。民間が、それを引き継いで、当時の1600万人、1700万人でしたか、1600万人のオランダ住民について全てのデータを持って分析しましたと」

水島「うん」

北村「その結果を一部だけご紹介すると、その生涯に渡って移民がお一人、入って来た時にリターンがあるのかマイナスがあるのかということを検討しましたと」

水島「うんうん、うん」

北村「そうすると、所謂、欧米系の中には、実は日本人を便宜的に欧米系に入れて検討しましたと」

水島「うん」

北村「そうすると、欧米系の移民の場合は、トータルして多分1千万のプラスでしたと。オランダという国にとっては、1千万プラスでしたと。日本人だけに限ると4千万のプラスでしたと。まあ、勤勉な日本人っていうことで、世界に貢献しているっていう話になる訳ですけど、じゃあ、他方で非欧米系の人達について検討すると、一人当たり生涯でマイナス7千万でしたという結果が出ましたと。その中で非欧米系の中で、アフリカ系イスラムと書いてあったと思うんですけど、その人達に限って言うと、マイナス1億1千万っていう結果が出ましたと。これは日本円に直してですね。

この結果というのは大変、説得力があって、私は、先日の沖縄での街宣の時も、それを説明しました。それを聞いた人達から、これをずう〜って言うてくれと言われたんですね」

水島「うん」

北村「ずう〜って言うてくれれば、もしかすると日本人の3割ぐらいが、それを納得して感情論だけじゃなくて、経済的にもメチャクチャ、マイナスですよねえと」

水島「うんうん」

北村「この結果っていうのは、オランダだけのことでなくて、日本人の実感としてもフィットするので多分、本当でしょうと」

水島「うん」

北村「だから日本でも同じことが起こりますよということ、まあ、日本国民の3割ぐら

いに広げれば、日本の政策は変わるということで、私は、これを言い続けようと思っているんですよ」

水島「素晴らしいです」

石井「素晴らしいです」

北村「感情論では無いんだと」

水島「うん」

北村「ということですよ」

水島「極めて具体的ですもんね」

北村「極めて具体的で素晴らしい論考でした」

水島「はい」

北村「他方でさっきから色々出ている差別とか排外主義という批判について、実は選挙でも、私は訴えたんですけど、これを言う人達、例えば、我々の言論に対して差別だ、排外主義だと言う人達について、それについて、私はこう考えていますと」

水島「うん」

北村「常に左翼の人達というのは、そういうレッテル貼りしか出来ませんと」

石井「そう」

北村「それしか出来ないの、それをやっていますと」

水島「うん」

北村「実は中味の具体的な議論をすると、あまりにも説得力が無さ過ぎて、国民の皆さんが、えっ、こっちの言うことが正しいだろう、我々の言うことが正しいだろうっていうことになっちゃうので、絶対に中味の議論に入ろうとしませんと」

水島「うんうん」

北村「だから、そのことを、よく理解して下さいということをお願いしています」

水島「はい」

北村「これからも言い続けたいと思っています」

水島「はい」

北村「仮に我々の言論が排外主義で違法行為だという訴訟が起こっても、必ず勝ちますと」

水島「うん」

北村「必ず勝ちますと。というのは、日本国憲法で保証されて、差別は禁止されている、それは、その通りだが、これは合理的な理由のある区別は憲法違反ではありませんと」

水島「うん」

北村「これは裁判官も全員、知っていますから、絶対に負けることはありませんと」

水島「うん」

北村「合理的な中味であれば、ということをお願いしておきたいというように思います」

水島「素晴らしいですね。因みに吉祥寺では外国人が3か月住んだら、全ての外国人に住民投票権を与える。我々は、これに反対していたら、それこそ、あの連中が来て騒いだ訳ですね。そうした時、実は毎日新聞が報道したんですよ。『ヘイトに襲われた町』っていうタイトルでね。ふざけんじゃないっていうね。確かに在特会の人とか色んな人が居て、我々も反対していたから引き潮時まで街宣をやったら妨害が入って、まあ、散々やったんで、2回目の時は吉祥寺の署長がちゃんと警備をしないで済みませんでしたと謝りに来ましたけども、ただ、今、おっしゃったように、我々は訴えたんですよ。

つまり毎日新聞は十羽一絡げに報じた。色んな団体があるじゃないですか。それを一緒にして私の団体までヘイト団体って、これは、おかしいだろうって言ったら、何と裁判所の

判決が『しっかり判らない』というね（笑）、旗もよく見えないし、何だかんだってね、お前ら、いい加減にしると、これが地裁ですよ。だから、こういうね、今、北村さんがおっしゃるように真面にやったら、負けっこないですよ」

北村「負けっこないです」

水島「ただ、そういう雰囲気やってね。それから言論の自由って、奴らの言論の自由な訳ですよ。私達を勝手に十羽一絡げにヘイト団体に入れちゃうっていうね。実際、こういうようなことが本当にあるんでねえ」

河合「でもヘイト、ヘイトって言っている人ってね、よくよく考えたら、左派が言っているっていうじゃないですか。実は左派とかじゃなくて外国人が言っているだけです。例えば私の事を邪魔して来るシバキ隊、あれは殆ど在日ですよ」

一同「うん」

水島「多いです」

河合「もしくは外国人をルーツとする、朝鮮系をルーツとする人達、今は日本国籍かもしれないけど、親子なのかお爺ちゃんなのか判らないけれども、外国人をルーツとする人達なので、基本的に外国人が言っているだけです」

水島「ああ、それも、うん」

河合「だから何世代も日本人でやって来ている人が、僕達の主張に対してヘイトだなんて言わないですよ。だから、これも外国人と日本人の戦いだけです。右と左と言うよりも、日本人対外国人ですよ」

石井「まあ、それは、ちょっと判らないです」

水島「それは、かなり事実に近い、うん」

河合「いやいや、僕のファイターは大体、そうです」

水島「だけど白人も居ましたよ。これは、あまりやらないけど、中指を立ててね」

石井「ああ、あの男ですか」

水島「目の前でね」

石井「実は某ジャーナリストですよ」

水島「あれはジャーナリストですか」

石井「うん」

水島「ヘイト、ヘイトって叫びながら中指を立てて、お前、そう言うって、どういうことか解っているのかっていうね。あの時、こういう奴も居ました」

石井「ただ、実は、さっき言ったように5本の刑事告訴を喰らいまして、4本が不起訴になって、民事訴訟4本を喰らっているんですけど、一人は国会議員の和田政宗です。俄然、理由がよく解らない。一つはクルド人。二つは活動家ですけど、その人達は、どう考えても収入が無いんですよ」

水島「え？」

石井「収入が無いはずですよ」

水島「ああ」

石井「朝から晩まで街宣やって」

水島「いや、だから、それは、お金が出ているんですよ」

北村「間違いなく、お金が出ているでしょ」

石井「あと、私は個人ですよ。皆さんの寄付で何とか全部、賄えましたけれども、精神的に参りますよね」

水島「全くそうですね」

石井「僕はバカだったので不器用だったから、こういう問題に残っているですけども、

僕は差別なんてした覚えは一つも無いですよ」

水島「うん、していないよな」

石井「言葉尻を捉えて可能性があるとか、ヘイトをやって、和田の、もうクルド人の問題は今、ヘイトというところが全然、認定されないらしいですけども、正に、北村先生がおっしゃられたように訴えられないので、最後の所は今、引っかかるかもしれないって揉めているんですね。言葉尻の中で」

水島「う～ん」

石井「こういう争いに何の意味があるのか。僕を止めることしか意味がないんでね」

水島「いやいや」

石井「何故、続けるのかなあって…」

水島「そうやって…」

北村「萎縮させるっているってことですね」

石井「そうですね。僕を潰して、他に正に河合さんとか他の人を潰していこうっていう戦略なのかもしれない」

北村「周りの人に対しても、やっぱり萎縮効果がありますから」

水島「そうですね。それでしょうね」

北村「それを狙っていますね、間違いなく」

石井「本当に何の意味があるのかっていう感じがして…」

水島「例えばシバキ隊がいくぞとか言うと、怖がっちゃう人も居るんですよ」

石井「僕は一回、私人逮捕したんです。私人逮捕で警察に突き出したら、僕が暴行された場面は写っていないから（苦笑）、僕だけ送検されたんですね」

水島「彼らは絶対に暴力をふるわないです。一つの例を挙げておくとね、じゃあ、おいでと、演壇に来いとね、一緒に議論をしようよと。出来ない訳ですよ。そうしたら一人、リーダ一格の奴が、おーいって手を挙げたので、おいでって言ったら、じゃあ喋らせてくれるんですねと言うから、いいよ喋らせるから、どうぞとマイクを渡したら、わあ～っ！と、ヘイトヘイトって何かああだこうだって演説して、アルバイトがありますんでって、消えちゃった（失笑）」

石井「ああ～」

水島「こういうことですよ。だから、まあ、あまり、こんな、つまらない話をしてもしょうがないけどもね」

石井「そうですね。申し訳ないです」

水島「いやいや、石井さんの話がつまらないんじゃないですよ。やっぱり今、纏めてくれましたけども、この問題は結局、そういうことですよ。それと、先程、北村さんが細かく言ってくれたので良かったですけど、皆さん、このコストの問題を本当に覚えて下さい」

北村「そうですね」

水島「この問題は凄く大事で、もう一つ言うと、何度も何度も、チャンネル桜に出て貰って私と仲がいい人なので言っておきますと、福井義高は未だ若いんですけど、マックス・ウェーバーのプロテスタンティズムというのがあるでしょ」

石井「『資本主義の精神』」

水島「そう『資本主義の精神』、論文を持って来たから見せて貰ったけど、あれは数字から何から全部、検証してウェーバーは間違っているっていうね」

北村「なるほど」

水島「凄いなあと思ったんです。学会で認められたのって言ったら、一部の人は認めてくれたけど、何か無視されているみたいですよ」

一同「(苦笑)」

北村「学会は左に傾いていますから(苦笑)、ちょっと、さっきので一個だけ補足させて下さい」

水島「はい」

北村「当然のことですけど、さっき申し上げた様な大変な投資に対するリターンがマイナスになっていると。これは誰にツケが来るかと言うと、我々一般国民が長年に渡って増税に苦しむことになる」と

水島「そういうことです」

北村「この増税に継ぐ増税をしなければ、全く社会を維持できないっていうことになる。そのことが非常に重要なのでということですね。はい」

石井「今の話に、ちょっと付け加えさせて戴くと、先行研究はオランダの話以外は、かなり出ているんですけども、ほぼ同じ形で結局、損になると」

水島「うん」

石井「但しGDPっていうのは、価値をこうやって増えるものじゃないですか」

水島「うん」

石井「労働力が増えたら、必ず経済成長は上がるんですね」

水島「うん」

石井「だから、正に北村先生が言ったこともあるんですけども、国全体では経済が成長しているように見えます」

水島「だから、そこですよ」

石井「企業は利益が出ている。絶対に出るんですよ」

水島「だから、ほんとはね、さっきボードに書いてあったけど」

石井「はい」

水島「つまり本当にそうだったら、その企業が雇うんだから、そのお金は全部、企業に出させりゃいいんですよ」

石井「そうそう、そう」

北村「そうになると、結局、企業は合わないの」

水島「そう」

北村「結局、企業はやらないっていうことですよ」

水島「そういうことですね(笑)」

北村「そういうことになる」

水島「ええ」

石井「クルド人問題で言うと、解体業に偏在しているんですけども、彼らがダンピングすることによって外部経済性ですね、つまり違法な不法投棄とかの社会コストもどんどん増えて居るし、あと正常な価格を出す日本の解体業は壊滅し始めているんですね」

北村「そういうことですね」

河合「もっと言えば、解体業は今、クルド人が、かなり安い金額でやっているの、日本の解体業がどんどん出来なくなっていると。仕事を取られちゃっている」

水島「うん」

河合「そうすると、下手したらクルド人に解体業を、ある意味、乗っ取られちゃうっていうことになる訳ですよ。この日本の解体業というのは、非常に大事な産業で基幹産業とも言えるようなものですから、そこを乗っ取られたら、じゃあ、仮にクルド人は出て行けとなって、殆どが不当移民だから全員、出て行けとなった時、もう日本の解体業者がありません。技術継承も出来ていませんとしたら、取り戻しが付かないことになるんですよ」

ね。だから、ひとつの産業を外国人に任せているっていうのは、やはり国として健全ではないということ、やはり強く認識しなきゃいけないと思いますね」

モーガン「結局、そういうことですね」

河合「はい」

水島「ほんとね」

石井「ところが調べたんですけど、埼玉県の担当者というのが僅か5人ですよ。県議の質問に対して、朝から晩までクルド人の申請書で一日が終わっちゃうと弁解していたそうです」

水島「だから解体業とかね、これは、もう一つ、今、東京で言うと火葬場。火葬場が今、中国系に全部、乗っ取られて、地方は火葬料が2~3万円で済むのが、今、9万円以上になって、更に、また上げようとしている。

つまり、こういったものも民営化という名の下に全部、乗っ取られているんですよ。で、間違いなく人間は死にますから、東京都の人口1千200万人。いい商売ですよ。間違いなく食い逸れが無いし、値上げしたって他に競争相手が居ない訳だから、これを何とか社という日本の会社が、中国系企業に売ったんですよ。それから、どんどん値上がりしている。

だから、こんなのは公営でやればいい話で、それこそ緑の狸さんが頑張ってくれて、公営の火葬場を創ってやるか、重税をかけるとか色んなやり方で規制しないと、本当に人間の命の終わりのところが、こういう状態になっていくっていうねえ。

それと、この辺は、よく質問が来ますが、イスラムの方が土葬をすると。沢山、増えて来るとありますけど、これは実際、日本でも江戸時代まであったし、今でも日本で土葬があるというのは、自治体によって違いがあるんですけども、これについては北村さん、どう思われますか。この土葬問題っていうのは、よく質問が来るんですけど」

北村「まあ、これは衛生上の問題も指摘されていますと」

水島「うん」

北村「もっと大きいのは、やはり日本って国土が非常に狭いですから…」

水島「うんうん」

北村「そこで土葬を何としてもさせてくれというのは、やっぱり筋違いだと思います」

水島「うんうん」

北村「やはり日本の国土は日本人の為に充分、使わなきゃいけない。ということが、僕は基本だと思います」

水島「うんうん。ということは、自治体によっては許可しているところもあるけれども、基本的には駄目というね」

北村「基本的には駄目。これはフィフィさんがこの間、おっしゃっていたので、私のうろ覚えなら、ごめんなさい。本来のイスラムの土葬っていうのは、一つの土葬の場所があると、そこに次々に、こう…」

水島「ああ～ああああ、ああ」

北村「同じ場所で、結局…」

水島「なるほど解る。ああ、そうそう、そう」

北村「何代も、そこに何人も土葬していくということをおっしゃっていました。私の記憶が間違いなければ、そういう形をするならば、まだしもということですね」

水島「ああ、それはねえ、私はドキュメンタリーで行ったことがあるんだけど、フィリピンのルソン島の北部、ポントック族とか、そういうのは今、おっしゃったように、亡くなると棺桶担いで、先祖が居る場所に行くんですよ。そうしたら空いている場所に積み重ね

たりしてね」

北村「積み重なるといふね」

水島「勿論、死体は一緒にはしていませんけれど、同じような場所で、だから同じ考えですよね」

北村「はい」

水島「こういうやり方もあるっていうことだねえ。まあ、だから…」

石井「さっき指摘された様に、存在感の増加の為に騒ぐ人は、どう主張しているのかなあという懸念もありますよね」

水島「いや、ほんと、そうだよねえ」

石井「はい」

水島「モーガンさんは、どう思われますか、

モーガン「はい」

水島「キリスト教は基本的に土葬というのが未だ多いけど」

モーガン「ああ、まあ、そうですね。ニューオーリンズの場合は、町なので土葬が出来ないですから」

水島「うん」

モーガン「それは、ちょっと独特な所で、うーん、そういう問題について、あまり考えたことがなくて、でも日本国内にクリスチアンの墓地もあるかと思って…」

水島「うん。ありますね」

モーガン「それはクリスチアンの墓地があるということは、やっぱり日本人がかなり寛容的で差別しないし、そういう風にやりたいと思ったら、どうぞという基本的なスタンス」

水島「そうですね」

モーガン「それが、ずうっと前からあるなあと思って、でも、さっきの北村先生のオランダのお話。そもそも何故、日本の納税者が外国人に投資しなければならないのか、私は違和感を覚えました。いくらリターンがあると思っても、そのお金を日本の子供に使いたいなと思って、日本国内で納税したお金を日本の子供に使いたいと。

あと、先程、河合先生がおっしゃったデモ隊の話。外国人が多いって、それは重要だと思いました。例えば、最近、アメリカではデモ隊が多いじゃないですか。蓋を開けて見れば、ソロスとか、そのような外国人が、アメリカ国内に膨大なお金を流していて、日本国内でも、そのようなことがあるのではないかと思って…」

水島「それはねえ、はっきり言って全員がそうだということじゃあないんだけど、私には来ないんだけども、所謂、街宣右翼っていう人達の中で、商売っ気でやっている人達。それと、ヤクザ系の人とか色んな人が居るんですよ、朝鮮系とかね」

モーガン「はい」

水島「こういう中で10年前か15年前ぐらいかな、1台、出勤すると大体40万円ぐらい出るっていうね」

モーガン「はい」

水島「だから、ある意味で言うと、頑張るとちゃんと日当が出るというようなことがあってね」

モーガン「ね。慰安婦問題とかがあると、あのような激しいアンチをやっている人は、日本人じゃないと思いますよ。はい」

水島「そういう人達が結構、居るといふようなことはありますね」

モーガン「はい、そうですね。何故、そういうことを言えばヘイトかと、逆に日本人を守りたい」

水島「はい」

モーガン「物事を、はっきりさせたい。こういうことがあるよって、このような、とんでもない奴らが日本国内では違法なことをやっているよって言うことだけでヘイトとか言うけど、全然、納得、出来ない。今、北村先生がおっしゃった通り、そもそも左翼って議論が出来ない」

水島「うん、そうですよ」

モーガン「だから、お前はレイシストだとかね、お前はファシストだあ、ヒトラーだとかと直ぐ飛んで来るといのは、もう思考停止しているんですよ。相手は、馬鹿だと思っていいと思います」

水島「本当に馬鹿ですけどね」

一同「(苦笑)」

モーガン「ヘイトとかと直ぐ言われるんですよ。ヘイト」

石井「破壊することによって、利益を得る人が居るんですよ。馬鹿なことをやることによって、利益が出ている。政治集団とか正に、これは陰謀論になりますので触れないですけど、また中国があるかもしれないですよ」

水島「いや、ありていにね、そういうのってチャンネル桜の沖縄支局がありますけどね、やっぱり韓国、北朝鮮、中国と、凄い影響があつてハングル文字とかね、基地の反対運動の中、そういうのが随分、沢山、入っていますよ。今、沖縄の左翼というのは全体的に今、落ちていますが、ただ、ずうっと狙っているのは沖縄の独立。琉球独立という形で中立化するっていうことを、中国と狙っている。尖閣もそうだけでも。

だから沖縄の一部の中国共産党の一部の人は、まあ、石平さんが知っていますが、あれは沖縄が元々琉球国で中国と一緒にやっている国だから中国だと言うような人まで居るぐらいでね、どんなことでも清という国の半島までは全部、中国のものだっていう意識があるんですよ。やっぱり、そこは見ておかなきゃいけないってことです。

アイヌもそうです。北海道が凄く危険だと思っているのは、あそこは何処まで本当か判りませんが、小野寺さんって元道議だった人で、留萌（るもい）から釧路の半分上、それと南の下の釧路というのは、中国が物凄く土地を買っている」

一同「う～ん…」

水島「それから、さっき言ったニトリみたいな日本の会社を経由して買う。つまり直接、中国が行くと、中々売らない。でも日本の企業が行って、それで転売する。転売、転売、転売。訳が分からなくしていくって。これがあるけれども、上の方は無いって言うんですよ。つまりロシアが、かつて占領を要求した所です。それからアイヌ協会というのは、これは、もう事実だから、はっきり言いますよ。チュチェ思想研究会の日本の創立メンバー、これが全員、幹部になっている」

北村「なるほど。解り易い話ですね」

水島「解り易いですよ。だから、こういう人達がやっている。それで何をやっているかと言ったら、自治共和国を創りたい。アイヌ自治区を創りたい。こういうことで、じゃあ、アイヌの人は、どのぐらい居るかと言ったら、血が四分の一以上は居ないんです。四分の一以下の人が1万数千人。それから先住民は歴史から言うと、鎌倉時代に現れているんです。所謂、モンゴル、元に追われて、樺太や色んな所を経由して北海道に渡ってきた人達。それで江戸時代も共存していたんですよ。松前藩の中でも。

ところが先住民と言っちゃっている。これは、まあ、お二人には関係無いですけど、日本の国会議員が全員一致で、アイヌ先住民法案を採択しちゃった」

北村「これは菅さんが実力者であった時にやったので」

水島「うん」

北村「大変、罪が重いと思っています」

水島「本当に全くそう」

北村「はい、菅元総理が」

水島「非常に良くないですね」

北村「はい」

石井「菅さんは移民問題でも出て来るんですね」

水島「だからねえ…」

石井「安倍さんよりも菅さんがやったと言われています」

水島「菅さんですよ」

北村「はい、菅さんです」

水島「うん。もう菅さんねえ、まあ、維新の方だから、あんまり、あれだけど、私が昔から言っているのは、実際、維新のオーナーと言うか、プロデューサーは菅さんですから」

石平「そう。そうだと思います」

水島「割と有名なことです」

石平「ええ、ええええ」

水島「有名って言うか、ただ、まあ、色々ありますから、こういう人も居るっていうことを言わなきゃいけない（笑）」

石平「（笑）」

一同「（笑）」

水島「みんなって言っている訳じゃないんですけど」

石井「ああ、そう。あと加える情報で怖いのは、原子力産業って日本で壊滅させられたんですね。勿論、福島東京電力の福島事故が悪いんですけど」

水島「うん」

石井「デモ隊を観察していたら、正に韓国系が居るんですよ。辿っていったら当時、韓国からお金が大量に出ていた日本のNPOだった訳ですね。ソウル市は当時、革新系市長でNPOにお金をばら撒いていた。だから、その時に沖縄と反原発デモというのは、非常に盛んだった訳ですよ」

水島「だからね、そういう意味では、海外の勢力がきちんと入り込んでいて…」

石井「はい」

水島「例えば北海道多民族共生共和国。日本人、中国人、朝鮮人、アイヌ、ロシア人と。あそこは満州国の再現みたいな（笑）」

石井「正にウクライナだって、そうやって攻められたじゃないですか」

水島「うん」

石井「ちょっとゾッとしました。丁度、2013年頃に原子力産業と言うと、韓国が全世界に売り込みをかけていた時ですね」

水島「う～ん」

石井「その関係も、もしかしたらあったかもしれない。あっ、ちょっと陰謀論めいてしまって申し訳ないんですけど」

水島「いやいや。ただね、現実の職員とかね、あの原子力職員というのは、本当は、技術職だから、ちゃんと継続しなきゃいけないけども、それが無くなって世界最高の東芝の原発なんていうのは、最高水準だったんだけどね」

石井「はい。実は東芝の本体が悪いですけども、韓国政府が何をやったかって言うと、丁度、潰れた、ごめんなさい、お話がずれてしましますが、潰れたドイツ企業のジーメン

スのあれを丸々買ったんですね」

水島「三井物産の会社だ。ああ、丁度、今日、取り上げたけど、昨日、ニュースに出ました。三井物産は日本の代表的な商社ですけど、ついに議決権ベースで、それもちゃんと含まれる中で10.2%、投資家で有名なバフェットって居るじゃないですか。ウォーレン・バフェット」

石井「はい」

水島「この投資会社が筆頭株主になりました」

石井「ああ、そうですか。知りませんでした」

水島「いや、もうねえ、ここまで来ているということですよ」

河合「本当にねえ、だから、私も外国人による、目に見えない人口侵略みたいなのが本当に進んでいると思っていて、要は中国でね、孫氏の兵法で言う訳じゃないですか。戦わずして勝つのは最上であると」

一同「(笑)」

河合「ね。戦争しなくても、人口侵略で勝てばいいんだっていうのがあるんじゃないかと、僕は思っているんですよ」

北村「間違いなくある」

河合「ありますよねえ。さっきニトリの話があつて思い出しましたが、参議院選挙の時にTBSの報道特集という番組があつて、その時に参政党批判がされていて、私がシバキ隊とかと繋がっているところも報道されたんです。それでね、そこで私がさも悪者のように報じられている訳ですよ。そこでは私の言い分なんか全然、報道されていない」

水島「うん」

河合「それで調べたら、そのプロデューサーが韓国人だったし、もう、ムカつくから、俺らスタッフでスポンサーを調べて、スポンサーにクレームをかけて行こうぜってやって調べたら、CMがニトリですよ。だからね、全部、もうズブズブで、気がついたらメディアも支配されているし、全部、もう侵略されているじゃんということを本当に感じます」

水島「そうですね」

河合「うん」

水島「私も、その例で言うと、聞けば直ぐ判るゼネコン、ゼネコンっていうか、それよりも、ちょっと下がるぐらいの建設会社の社長で、若手のいい男だった方と一緒に飯を食ったら、水島さん、うちはチンタオとか色んな所に工場とか原料とか全部、やらしていません。今、鰻重を食べていますけども、これを知られたら、結構、拙いですよと言って、僕は、ちょっと会いたいからお会いしたんだけどって言ってね、そういう感じですよ。

つまり、その時点は、もう十何年前ぐらいですかね、つまり、そのぐらいまで全部、取り込まれている。当時から中国はどんどん経済発展していたから、マーケットになっていった訳ですよ。原料とか供給の工場だけじゃなくて、そういう中国自体がマーケットになる。だから今、貧乏な人は貧乏だけど、年収1億円以上の方が1億人も居るって言うじゃないですか。こういう報道をされているのを見ると、我々の国の人口ぐらいの人の年収が1億円以上っていうことを考えたら、ちょっとビックリするんだけど、中国人が日本に来て色んな物を買うのは当たり前って言うか、安いですよ、土地もね、企業もね」

河合「だから中国人が土地を自由に買える。外国人が日本人と同じ条件で土地を買えていること自体、おかしい訳ですよ」

北村「それは、おかしいです」

河合「おかしいですよ」

北村「はい」

河合「例えば、日本人が中国に行って土地を買えるかって言ったら、共産主義で国有化だから買えない訳じゃないですか」

水島「買えないです」

河合「それなのに中国人は、日本の土地を買えます。これは外交上の相互主義違反ですよ」

水島「相互主義違反です」

河合「ね。そうですね」

北村「相互主義だからと言って、日本人が中国で土地を買えるようになったからいいよおという訳にはいかないですよ」

河合「勿論、そうです」

北村「例え、そうなったとしても」

河合「勿論、そうです。今、向こうの方が経済は上ですし、向こうは買えちゃう訳だし、自由経済だと負けちゃうし、あとはね、大事な基地とか色々な大事な所を買われている。水田が買われているとか。中国は、所謂、地理的に将棋の駒みたいに、ここを買ったら外交上、有利になるとか、そういうことにも能力が高いと、私は思っていて、例えば、チベットを買う理由とかも、チベットってあらゆる川の水源であると。ガンジス川があったりチャオプラヤー川、メコン川、黄河、長江があったりするんで、その水源だから、絶対にそこを抑えたいとかね、そういう狙いが多分、あると思うんですよ。だから日本の山の水源も必ずいい所を狙って来るとかって、絶対にあるから、本当に無制限に買わせたら、とんでもないことになるっていうのは自覚しないとイケない」

水島「東南アジアは、完全にチベットから源流ですから」

河合「ええ」

水島「メナム川もメコン川も、みんな、抑えられて…」

河合「そうですね」

水島「ダムを造ろうとしているから、みんな、戦々恐々ですよ」

河合「はい」

水島「全部、言うことを聞かなきゃいけない」

河合「うん…」

水島「東南アジアのね」

河合「そうです」

水島「だから、それはいいことじゃないけど、こういう人達が居るっていうね（失笑）」

河合「うん」

水島「我々は、いい悪いじゃなくて、現実的にこういうことをやられた時、どうするんだってね」

河合「性悪説に立って考えないと、起こってからでは遅いですから」

水島「うん」

河合「そう」

北村「習近平さんが、毛沢東を崇拜しているというのは有名な話ですよ」

一同「うん」

北村「毛沢東が言っていたことを見ると、毛沢東っていうのは、まず移民については、砂をばら撒くんだと。砂をばら撒いて、固まった所という話ですよ」

一同「うん」

北村「砂をばら撒いて、長年、ばら撒くと増えて多くなると」

水島「うん」

北村「その段階で、そこに共産党員を送り込んで、そこで暴動を起こさせると。つまり、暴動の中身は、この国で差別されていると言って暴動を起こさせる。虐待されていると言って暴動を起こさせる。そうすると、その国の警察が、これを鎮圧に来る。鎮圧に来た段階で人民解放軍を送り込んで、これを制圧する。制圧して暫くした所で、住民投票をさせる」

水島「うん」

北村「住民投票させて、独立宣言をさせる。国になったと言わせる。その瞬間に、中国は、これを国家承認する。即する。暫くして、この国に、うちも小さい国で不安なので、中国さんと一緒にになりたいんですけどと言わせる」

水島「うん」

北村「そして合法的に中国の領土にするんだと」

一同「う～ん…」

北村「これが毛沢東の主張です」

水島「うん」

北村「習近平さんは、これを、そのままやろうとしているように見えます」

河合「いや、もう西川口は今、本当におっしゃったままですよ」

北村「ままでしょ」

河合「だって、今、歩いていると、10人居てね、3人4人が中国人ですから」

北村「はい」

河合「そこでおっしゃる通り共産党員が、僕の演説を妨害しに来て」

北村「ええ」

河合「もう本当に、そのままになっています」

石井「中国人が騒いでいるんですか。そこまでは見ていない？」

河合「共産党員がね、今、おっしゃったでしょ」

北村「共産党員」

河合「そう。僕は、それを在日とか色々外国ルーツだと思っていますけど、おっしゃる通り共産党員がそこに居ます」

北村「基本的には、そういう戦略を練っていてね」

河合「はい」

北村「それに彼は毛沢東を崇拜していますから」

一同「うん…」

水島「本当にね、その通りだと思うので、これに対抗できることを、ちゃんとしないと、私は別に毛沢東を応援する訳じゃないけど、中々のもんじゃないですか」

一同「(笑)」

水島「ねえ、あくどい考えでね」

北村「ええ。経済は全く判らないけど、そういうところはね」

水島「ねえ。それは凄い政治的な手法としてはねえ」

北村「毛沢東っていうのは優れているんですよ。はい」

水島「だから、こういう人達が居るっていうことですよ。それで実際に川口でも何処でもやっているということを考えると、北村さんのお話を伺いながら、ああ、北海道がそうじゃないかと思った」

北村「はい」

水島「北海道が、そうですよ」

北村「そうです」

水島「誠に今言った砂をね、何だかんだ最初に撒きながらね」

北村「はい」

水島「あと、もうニセコとか倶知安とか、もう、どんどん、そうやって植民地をつくっているし、もう入れないですよ。これは機械のせいもあったかも分からないけど、例えば、私有地になっているので中に入れられないから、ドローンを飛ばして上から見ようとしたら（笑）、二度に渡って撃ち落とされたっていうか、何故か落下して駄目になっちゃって」

石井「ジャミングをかけているんでしょうね」

水島「いや、それは分からない。まあね、急に駄目になってバァーンッと落ちちゃうので、もう一回、挑戦してみると、また落ちちゃう。だから何か事件でも起こらない限り、警察でも中に入れられないですから、もう、こういう状態が凄く増えちゃったんですよ」

石井「川口も、その状況が起きていますからね」

水島「だからねえ、ほんとねえ…」

石井「日本の警察って、ちょっと不安だっという話をしましょうか。多分、PKKはクルドと中国と関係無いんですけど」

水島「うん」

石井「これは堂々と有名な写真にしちゃったんですけども、トルコでも拡散していて、テロ組織の旗をやっている男が仮面を被って、川口でウロウロしているんですね」

水島「うん」

石井「議事録で、法務委員会を調べたんですよ」

水島「うん、うん」

石井「違法外国人管理の質疑って、日本保守党の島田先生と参政党の吉川さんしか議論していないんですよ。立憲民主党は今年の段階で、外国人の子供達の人権、滞在権を与えろとか堂々と言っているんですね。高市さんが自民党総裁で、外国人問題はゼロベースで見直すと言ってくれたし、この前、不法滞在ゼロプランを選挙で出したんですけども、やってくれるの？っていう感じはするんですよ。だから維新とか保守党に期待したいんですけども、本当に日本は、こういう治安の根本をやっているのかなというのが一点と、自民党は信用できないというのが一点」

水島「うん」

石井「それに行政も何かなあなあ主義で、日本の行政が優秀というのは、もう幻想にしか過ぎないと思っていて、凄く放ったらかしている訳です」

北村「最初に議論があった公明党が離れたことによって、可能性は大分、上がりました」

水島「はい」

北村「加えて、私の見るところ、自民党って保守層と、とんでもない左翼と、それ以外の何も考えていない当選さえ出来ればいいと考えているボンクラがメチャクチャ多く、いっぱい居るんですよ」

水島「なるほど。その通りだね」

北村「この人達は頭がこっちになれば、こっちへ行きますよ」

水島「うん」

北村「頭がこっちになればこっちへ行くと、何も考えていない議員が多数居るので、僕は政策事変の可能性はあると思っと思っていますね」

水島「なるほど」

北村「はい」

石井「それは、いい考えで、中をよく見て、まあ…」

北村「まあ、それは外から見ているんです」

石井「確かに外ですけれども（笑）」

水島「いやいや…」

石井「それは説得力のある話ですね」

水島「今、北村さん指摘のボンクラが、あまりにも多過ぎるんじゃないかっていうね」

北村「二世、三世のボンクラが殆どですから」

水島「はい、本当に多いですよ」

石井「さっき言った、外国人土地規制が議題に上げると言ったのが5年前であり、追加をしますと言ったのが、今年の選挙じゃないですか。日本国民は20年間も放ったらかしにされていた訳ですよ」

北村「そうです。ずうっと放ったらかし」

石井「大丈夫かなという感じがします」

北村「いや、大丈夫じゃないですよ。少なくとも大丈夫じゃなかったですよ」

石井「はい」

水島「だから高市さんが選ばれたのは、やっぱり一つは、参政党、日本保守党、それから国民民主党か。こういったのが少なくとも、民意を受け取る感性を持っている。本当の政策で何処までっていうのはあるとしても、例えば手取りを増やすっていうのは解り易いじゃないですか」

北村「解り易いです」

水島「本当に貧乏していて、頭にきているからね。増税ばかりしやがってみたいだね」

石井「外国人問題がこれだけフィーバーして、フィーバーっていうのは良くない言葉かもしれないですけど…」

水島「うん」

石井「関心を持たれたのは、正に国民の意志だと思うんですよ」

水島「そうですよ」

石井「はい」

水島「だから参政党だって、あれをやったでしょ。移民の問題でちょっと拙いぞと。それからパンデミックのワクチンだって、今頃になって、やっと、アメリカの厚生省もRFKジュニアがやり始めて、つい昨日ですかイベルメクチンを奇跡の薬だって褒めたの」

石井「そうなんですか、それは、それは…へえ～」

水島「今頃になって」

モーガン「この5年間は、何処かで眠っていたかもしれない（苦笑）」

一同「（苦笑）」

水島「遅いんだよって」

モーガン「遅いんだと（苦笑）」

水島「安倍さんがやろうとしたんですね。そうしたら、いつの間にか『アベノマスク』に変わっちゃったっていうね。だから、こういうことが今、どんどん出ている。本当に世界の公衆衛生まで、グローバリスト達の商売と言うか、金儲けのネタにされてきている。だから日本人の命も、そういう風に思われている。

やっぱり私はガザの虐殺とか、ああいうのを見ると、商売になるなら金儲けなら何だってやる。それはウクライナだって、2～3週間前から始まってから2～3週間後に停戦になると言っていたじゃないですか。あれをジョンソンという当時のイギリスの首相が乗り込んで、また伸ばしちゃったでしょ。それで何十万とも100万以上ですよ、恐らくウクライナの青年とかロシアの青年達が命を落とした。

それで儲けたのは、ノルドストリームをちょん切ってアメリカの石油メジャー、これは、

もう全部、ヨーロッパに供給する。高くなってヨーロッパの経済がガタガタになっちゃった。それから今、ロシアが占領しているからあれだけど、ウクライナの三分の一ですか、あの小麦と農耕地だって全部、ブラックロックという最大の金融会社が取った。今言ったように食糧から何からね。それから武器商人は、もう嫌って言う程、在庫が無くなるぐらい大儲けした。

だから戦争で金を儲けている奴が、本当に多いというね。自由とか民主主義じゃないですよ。それが明らかになって来たことは良かったと思いますがけれども、ガザとかがこうなるから、我々の国が、いつ、そういう意味で、さっき毛沢東の戦略と言ってくれましたけど、こういうものを使って、外国人というもののの中のトラブルというものを起こして、やはり、こういった日本の内部の乱れ。

今回、正直言うと、私は本当にカオスになったと思いますよ。つまり彼女が勿論、相対的には自民党が一番、多いけれども過半数は取れないし、それから、最初に脅かして靖國に行かないって言わせたでしょ」

北村「はい」

水島「今回は公明党が離脱する」

北村「はい」

水島「どんどん高市を虐め倒すという訳じゃないけども…」

北村「高市は包囲網ですね」

水島「うん。出来ないようで、それで、そうすると、みんなねえ、やっぱり何も出来ないというような形のイメージにもっていく訳だね。だから、私がこういう流れで総裁戦の前に言ったのは、その次を見ているよと。つまり総選挙をやる迄は高市にやらせて、そのあとは、もう次の…」

モーガン「そう」

水島「あのアップラパーの、空っぽ頭の進次郎とかね」

モーガン「そう」

水島「こういうような人達を使い易いから、軽い神輿だから」

モーガン「そう」

水島「こういうことまで本当にねえ、だから維新の会にも保守党さんにも参政党さんにも頑張って貰いたいと思いますけどね」

北村「だから、ここは保守が結集するチャンスですよ」

水島「うん。そういうのはプラスに考えた方がいいよね」

北村「ええ、チャンスですよ」

水島「うん」

北村「はい」

水島「だから、それを本当に、ある意味での政策をきちっとね、全部一緒なんていうのは無理だから。憲法とかね。例えば経済政策の問題、消費税を減税で一致しようとか、ある意味で、こういう移民は規制しようとか、こういう大きな課題で3つやって、とにかく、そこまでは暫定政府でも、いいから創って、高市がそれを主導すればいいんですよ」

北村「そうです」

水島「それで、あとは、みんな、選挙で闘おうぜってやればいいということになると思う訳ですけど、中々そうはいかないということで、これからのことと言いますと、ここで5分ばかりお休みを戴いて、これからのことについて、皆さんに美しい提言をして戴きたいということでございます。では、一回、お休みします」

一同「(礼)」

<後半>

水島「後半になりました。もう時間も残り少ない状態になって来ましたので、ある種の纏めと言うか、これから日本が実現できるかどうかは別として、日本と世界。特に移民の問題に関しては、ヨーロッパもボチボチ、スウェーデンは金を払っても出てってくれとかね。色々なものが始まっています。やっぱり一番の問題は治安が悪化するとか、中々文化摩擦が凄いということだと思います」

そういう意味で、これから、どう日本があるべきか、皆さんから、ご意見を伺って、それで纏めの議論に入りたいと思います。では北村さんからいいですか」

北村「はい。まず日本は未だ間に合うと」

水島「間に合う」

北村「ヨーロッパの惨状を見ていて、これで学ばなければ、日本人は馬鹿過ぎるよねと」

水島「(笑)」

北村「そういうふうには思っています。でも日本人は学ぶ力があると」

水島「うん」

北村「ただ、これまで左翼の言論に、あまりにも押され過ぎていて」

水島「うんうん」

北村「これはメディア等が、よってたかって左翼言論で安倍さんも潰そうとしました」

水島「はい」

北村「ところが今、状況が変わりましたと」

水島「うん」

北村「どう変わったかと言うと、正にこういうネット番組、SNS」

水島「うん」

北村「ネット番組と言っていいんですか」

水島「はい。全然、別に問題ありません」

北村「ごめんなさい、私は、よく知らなくて。YouTube やX等で、この莫大な量の発信があって、それを見た若者は、ああ、なんだ、テレビって全然、信用できないよねと」

水島「うん、うん」

北村「テレビ、観るのをやめたと」

水島「うん」

北村「テレビは、もう年寄りしか見ないということで、新聞は勿論、誰も読まないとなると、所謂、オールド・メディアの影響力は激減しているということは、我々が真実を発信することによって世論は必ず変わると」

水島「うん」

北村「外国人問題も含めて」

水島「なるほど」

北村「なので、私は大きな希望を持っていると」

水島「うん」

北村「そういう中で、高市政権が誕生しそうだという状況」

水島「うんうん、うん」

北村「これは保守勢力が一致して、これを結集させて応援して、保守の政権を創った上で、さっき言った自民党のどうでもいい、どっちにでも行ってしまう何も考えていない人達も味方につけて、そして世論も味方につけて、外国人問題、土地取得規制、建物も含めて、これを世論の力で動かしていくと」

水島「うん」

北村「こうすれば日本は今、壊されかかって来ましたが、必ず軌道修正できるというように思っていますということですね」

水島「もう一つ、皆さんに聞こうと思っているのは、解散は早くやった方がいいと思いますか。待った方がいいと思いますか」

北村「(笑)」

水島「(笑)」

北村「難しい質問ですね(苦笑)」

水島「難しい質問ですね(笑)」

北村「私、これは、もう…」

水島「高市政権がどうなるかで違いますもんね」

北村「はい。仮に私が高市さんであって、且つ高市政権が出来た段階であると仮定すれば、私なら直ぐに解散します」

水島「はい、なるほど」

北村「はい。これは悪い奴だからと、僕は言っているんですけど」

水島「(笑)」

北村「自分は悪い奴だから、取り敢えず政権基盤を固める、その為には、これまでよりも悪くなることは無いだろうと」

水島「うん、なるほどね」

北村「これまでと言うのは、石破政権で失った議席数を、それ以上に失うことはないだろうと。その上で国民に選挙で問うと」

水島「うん」

北村「我々の保守の考え方に賛成しますか、しませんかと問えば、今は保守的な考え方で絶対に選挙では勝てるという状況にあるんです。もう参院選で明らかだった」

水島「そうですね」

北村「それが日本保守党にとっては大分、マイナスですけど、多分、岩盤保守層が日本保守党と参政党に流れた票が、もしかするとトータル1千万票ぐらい自民党に戻るかもしれない。ただ公明党の票は離れると」

水島「うん」

北村「プラマイ・ゼロかもしれないし、プラス・アルファかもしれない、それは分からないと」

水島「うん」

北村「私が高市さんだったらそうすると。でも高市さんは私と違って善い人なので、国政を停滞してはいけないと考えて、多分、来年の4月5月ぐらいまで解散しないんじゃないかと思います。はい」

水島「なるほど。はい、有難うございます。では、石平さんは、どうですか。これからのことを」

石平「先程、北村先生が日本は未だ間に合うという話ですけど、確かにね、例えば、今、思い出した幕末の時は、中国が西洋列強に散々やられて、もう植民地化寸前の状況で、それで確かに高杉晋作が上海へ行って上海の惨状を見て、それは日本がそのままだと

いかんと思って、それで彼達、長州が明治維新を起こしたと。だから今も日本人はねえ、やっぱりヨーロッパの惨状を見て、今回、上海ではなくて、もう、そこは新しい政治を起こさなければ、日本民族はぎりぎりの線で、今、行動を起こさなければ、将来的に大変なことになっちゃうんです。ヨーロッパの二の舞になっちゃう。

ですから、今、そういう意味では、この民族の国を救う肝心の時期で、やっぱり今、北村先生がおっしゃったように、もう保守大同団結しかないだろうと思います。丁度、公明党と断つのが、一つのきっかけになるんだろうと思います。どんどん自民党の中の左派勢力も、このまま公明党と一緒に出て貰っていいし、まあまあ、勿論、別の他党の話ですけどもね、本当の保守の人々、自民党の中の保守にしても保守党の保守にしても、参政党にしても、或いは維新にも未だ保守勢力は居るんですからね、何とか形で団結して、もう、そういう党派のことを考える時じゃないです」

北村「そうですね」

石平「一致団結するしかないだろうと思います」

水島「なるほどね。だから今聞いたように、本当に自民党の中にも色んな奴がいる」

石平「うん」

水島「維新の中にも色々あるし」

石平「そうそう、そう」

水島「連合の国民民主党にも色々あると」

石平「うん」

水島「だから、その辺の政党の粹ってというのが、これから、どういう形になっていくか、これも考えて行かなきゃいけないです。今、同じ質問ですけど解散はどうですか（笑）」

石平「そこは俺には全然、判らない（笑）」

水島「はい、なるほど」

石平「政局の話は全然、判らないですわ」

水島「いやいや、判らないっていうね」

石平「うん」

水島「悪い人は早いと思います（笑）」

一同「（笑）」

北村「悪い人は直ぐやると思います（笑）」

水島「結構、リアルな話です。では、石井さんはどうですか」

石井「保守勢力が纏まるというのは大賛成ですけど、移民問題は楽観的かもしれないですが」

水島「はい」

石井「移民問題、外国人問題でパーシャル連合っていうのが本当に出来ないかなあって、これはテクニクで、かなり解決する問題です」

水島「うん」

石井「但し根本は、最後、やっぱり国の意志決定で、実は人口が減っていく中をどう受け止めるかって、もう国の在り方の問題は考えるべきだと思うし、実は、僕はチェックを、日本経済に悲観的な人間で、縮小均衡を目指さなきゃいけない時期になっているのかなと。大国の地位はある、大国ではあると思うんですけども、ある程度、おりて、それで地方自治体も縮小していく、人口が減る借金国家では仕方が無いと僕は思っています。これは楽観的かもしれないですけど、さっき言ったようにテクニクで出来る、今直ぐの問題を直ぐに解決して欲しい」

水島「うん」

石井「積極的な外国人問題の、広報さえ徹していない」

水島「うん」

石井「日本人ファーストっていうのは誰だって、実は、左の人でも賛成せざるを得ないじゃないか、これは楽観的だと思いますが、厳格な法適用を違法外国人に行うんですね。無駄な争いはやめてくれ程度は呼びかけられるんじゃないかなっていうのと、その分けた上で長期的な外国人労働者対策で、国民の決定を基に受益者負担をやって、人権を配慮しながら、日本の社会の一体感の維持っていうのは守りつつ、制度設計っていうのは、暫く時間をかけてやって欲しいなあと思いますね。

今、高市さんとか正に参政党の政調会長の方がおっしゃっているように、一時停止っていうのもあり得るのか、外国人受け入れの一時停止と国の意志決定と制度づくりというのは、少し時間をかけてもやる価値は充分にあるんじゃないかなあと思います。出来れば問題解決の為のパーシャル連合、勿論、保守の方の大同団結は大賛成だし、それが実現すれば、移民問題も解決し易くなると思うんですけども、まず問題解決の方に、ちょっとシフトして欲しいなという期待は持っています」

水島「そうですね。これは、やっぱり、また、あとでも出るかも分かりません。つまり、保守というのが何処、どういうところで保守なのかを区別するかということで、今言ったように経済論で言っても、保守でも、石井さんと、よくぶつかるっていうか」

石井「(笑)」

水島「意見が違うのは、所謂、財政均衡論」

石井「はい、やや、そうですね」

水島「私は、どっちかと言うと積極財政論で違うところがあるんですけども、そういう問題はね、やはり、これは右と左って、実は、あまり関係ない」

石井「うん」

北村「本来はね」

水島「ね。国民が幸せになれるか豊かになれるかの話だから、さっき言った様にパーシャル連合のこともリアルな話になるかも分からない。もう右左の理屈だけで、自民党の中にも凄く悪い奴も、沢山、居る訳だから」

石井「ああ、そう。今の外務大臣みたいに、移民万歳の人も居る訳ですからね」

水島「う～ん、まあ、この辺のところはね、やっぱり、あのねえ、丁度…」

石井「治安を守るっていうのでは、一致できると思うんですよ」

水島「それは一致できるんですよ」

石井「まず、それをしなかったって、今迄、手をつけなかったのが問題であって、それは、ちょっと理想論かもしれないけれども、ちょっとパーシャル連合っていうのも、移民問題について考えたらいいと思いますね」

水島「だから、そういう形を、さっき、お二人が言っていたチャンスだっていうことで、どの枠組みでやるかっていう問題は、これから色んなことを考えなきゃいけないと思うけど、ただ、やっぱりねえ、せっかく選んだんだから、やるんだったら一応ね」

石井「まあ、そうですね」

水島「そういう思い切ったことをやって貰いたいですね。今迄の自民党と何とかと何とかの枠組みとかいうことじゃなくてね、公明党の中にも反乱がおきるぐらいのことが起こるといいんですけども」

石井「ただ、私のようなやり方だと、多分、日本的な、なあなあうう～で薄められちゃう感じがするので、やっぱり、どっちかに傾いた方がいいのかなあという気はしますね」

水島「ちょっと悪党が必要になってくる」

石井「悪党（笑）」
水島「別に北村さんが悪党って言う訳ではないけど（笑）」
北村「いえいえ（苦笑）」
水島「悪の感覚を持ったことをやらないとね」
北村「そうですね」
水島「今、なあなあで、というかね、穏やかに、というのは中々いかないと」
石井「きれいごとで、グローバリズムで移民問題、外国人問題がずっと来たんですよ」
水島「そうだね」
石井「それは本当に消して欲しいなあと思うところではあります」
水島「はい」
北村「ただ石井さんが、治安を守るということでは、一致できるはずだとおっしゃるんですが、そもそも国益を考えていない議員が沢山、居ますんでね」
石井「ああ、そうですね（笑）」
北村「そちらで一致出来ないんですよ」
石井「ああ」
北村「だから、とは思っています、僕は」
水島「それは、あるよね」
北村「はい」
水島「根本が変わっちゃうとね」
北村「はい」
水島「中々ねえ…」
石井「国会審議とかを見ると、本当に真っ青になるぐらい、こいつら何人なのっていう、日本語を読んでいるけれども何処の国の審議なのって、外国人に同じ権利を与えろなんて、堂々と山本太郎さんとかおっしゃっていますので」
北村「国益は考えていないです」
石井「うーん、どうして…（苦笑）、法務委員会なのに、彼らは経済とかに関心ない法務委員会に、彼らの中のエースを投入しているんですね」
水島「うん」
石井「有田芳生は、知的なレベルで言うとエースとは思えないですけども、ああいう目立つ人が何故か法務委員会には、うじゃうじゃ居るんです」
水島「だから、パフォーマンスが上手いんですよ」
石井「うん。だから、何の意味があるのかなあって感じがしますね」
水島「15年だか17～8年前ですか、何処かの、アメリカのシンクタンクの発表だったかな。中国は、あの当方で7千億、使っていたって」
石井「広報費ですか。広報と言いながらの工作費ですか」
水島「勿論、そうですね。ただ、今は、もう、その10倍ぐらいになっているでしょうね。本当に、そのぐらい広報と言うか、対外工作というものの自体の大事さは判っている。日本の政治家が一番、解っていないんじゃないかっていう気がして…」
北村「それは民主主義と独裁との違いですよ」
水島「うん、それもあるよね」
北村「誰からもチェックされない人達は、いくらでも使えるので」
水島「やるんだよね」
石井「本当にそうですね」
北村「はい。僕は、そこは違うと思いますよ」

水島「はい。じゃあ、モーガンさん、お願いします」

モーガン「ああ、私ですか。はい。有難うございます。日本国内では、移民問題も勿論、非常に深刻な問題で、しかし色々な所では外国人問題が潜んでいると、私はそういう意識で、それを一つ一つ、これは外国人だよと。外国人作業員とか外国人が日本人に対して、色々な工作をやっていることを明白にしないと駄目だと思います。例えばウクライナ問題を今迄、操作してきたウクライナの人々、ウクライナ国籍を持っている、言ってみれば、サギレンコとか、あのような人々が日本の保守の側近に居るんですよ。ウクライナ問題については、ずっとプロパガンダを日本国民に送り込んでいる訳です。それは外国人問題ですよ。日本の警察は何故、この人々、外国人が日本国内で工作をやっているかどうか、それを徹底的に調べて貰いたい」

水島「うん」

モーガン「イスラエル。イスラエルは、どれだけ、この国のメディアを操作しているかと。あのエマニュエル総督が何処の国の為に、この日本国内では行動していたか。アメリカの為にイスラエルの為に、そのどっちか」

水島「うん」

モーガン「それを明記したい」

水島「うん」

モーガン「あと、中国問題ですね。中国人が土地を買っているとかメガソーラーとかね。それが非常に深刻な問題で、中国問題って意外と解り易いんですけども、でも、そういうことについて言う勇気のある人が、中々足りないような気がしています。あと、これから私が言うことは多分、怒られるかもしれないけど…」

北村「(笑)」

水島「逆だね、怒りますね(笑)」

モーガン「北大西洋条約機構が外国人問題。あのNATOの連中が日本に来て、NATOが企んでいる戦争に日本を巻き込みたいと思って、それは外国人問題です。ウクライナの為にとか、トランプがウクライナにトマホーク・ミサイルを送ると言っていて、もしウクライナとロシアが、そうやって直接、アメリカとロシアが戦争状態になったら、日本がアメリカの同盟国じゃないですか。

それはロシアと戦争になる訳じゃないですか。誰もその話をしていないし、あの総裁選を見て、もう、みんな、馬鹿な事ばかり言っていて、本当に真剣な問題について何も言わない」

水島「うん」

モーガン「あとは在日日本人が問題です。在日日本人」

水島「うん」

モーガン「日本国籍を持っているんですけども、例えばNHKは明らかに中国とワシントンの為に報道している」

水島「はい」

モーガン「あの英霊を侮辱していた朝のドラマで、ヒットラーだとか英霊を侮辱している、それは日本の放送局だと思わないし、拝米保守も在日日本人ですよ。ずう〜っと、ワシントンの為に、あと新自由主義者とか会社の都合が良ければいいとか。じゃあ、日本国民はどうなったかと、あのウォール街とか、あのような外国人が非常に深刻な問題だと」

水島「うん」

モーガン「あと、JICAですね。それは在日日本人の塊で、直ぐJICAの予算をバサッとカットしていいと思います。あのアフリカ・ホームタウンとかだけではなくてJICA

Aが、ずうっとODAを担当してきたじゃないですか。我々の血税を中国とかウクライナとか外国に、我々の血税を送って来ました。外国人問題がスッキリしない一番の理由は、自民党がワシントンのポチだからです」

水島「うん」

モーガン「あの高市早苗は詐欺師です。ペテン師です。ちゃちなペテン師に過ぎません。あの人は自民党を救う為に選ばれた訳です」

水島「うん」

モーガン「あの自民党は、構造的にワシントンに仕える組織ですよ。あの高市は、LGBT法案に可決したじゃないですか。また討論会があって、ひろゆきさんですか、アベマのひろゆきさんが、これから英語で何か言って欲しいと言うと、あの高市は何と言ったか。トランプに対してJapan is Backと言うんですよ。この国を占領している国に対してアピールする、その異常な状態」

水島「うん」

モーガン「この国を占領している軍隊を追い出すんじゃないですか。この80年間、この国をずうっと占領して来た米軍を追い出さない限り、日本では何も始まらない」

水島「うん」

モーガン「最も重要で、最も深刻な外国人問題が、米軍基地です」

水島「うん」

モーガン「ずうっと外国人の都合ばかり優先されて来て、喜んでワシントン・パワーの前に、ひれ伏して、解ったあと、はい、了解ですと言って来たのは、高市早苗と他の自民党は、みんな、そうです。日本の政党ではない。ワシントンが派遣した売国奴の塊ですよ。あの人に対して解散命令をしなければ、日本の未来が無いです。それを全部、決算しなければならない。自民党がどれだけ外国人に奉仕したかと。この70年間ですよ。あの長尾たかしさんが、この間の月刊誌Willに投稿して、CIAが自民党を育てたと認めたのに、それでさえ自民党を立て直したいと言っているんですよ。それを思考停止だけだと思わない訳ですよ」

水島「うん」

モーガン「おかしいですよ。CIAが我々の党を育ててくれました。だから、立て直しましょうって、おかしいですよ。外国人の為に動いて来た我々が、恥ずかしくて、他の国ではそのような論理は通じません。これから私の言うことが一番、怒られると思います。戦後の日本の世代が、みんな、そうじゃないですよ。でも、その世代が、日本史で最も恥ずかしい世代です。一度も独立しようとしなかった」

水島「うん」

モーガン「産経新聞の奴ら、拝米保守、正論とか自民党とか。但し唯一、独立しようとした総理大臣が居ました。安倍さんです。どうなりましたか」

水島「うん」

モーガン「あの安倍さんは、どうなりましたか。高市早苗という人は、根性が足りない」

北村「(笑)」

モーガン「ただの傀儡人形に過ぎない、ペテン師です。詐欺師、ハッキリ詐欺師です。高市早苗を信頼してはいけません。自民党を救う為に彼女が動いています。もう既に日本の子供を犠牲にしました。自民党が問題です。最も深刻な問題は、自民党がずうっと協力してここまで来たということです。以上です」

水島「はい。今の指摘はね、ウクライナから始まって、この問題が、実は、本質的な問題を含んで、お話しになっていると思います。今、敢えて言うと、私は安倍さんと個人的に

勉強会を、ずうっとやってきた人間なので解りますけど、気持ちは色々ありました。第二次安倍内閣で1年ぐらい迄はあったけども、その時、TPPはどうするんですかっていう話でね、TPPは未だ決めて無いです。それで、竹中を辞めさせなきゃ駄目ですよと言ったら、いや、水島さん、竹中という人は学者じゃないんです、政治なんですと。つまり彼が言ったのは、あれはアメリカから、ちゃんと送られた人間で、だから動かしようが無いんだというようなことで、やっぱり、それから安倍さんがずう~っとグローバリズム政策に落ち込んで、移民法…」

モーガン「確かに」

水島「アイヌ新法の時から」

モーガン「はい」

水島「今迄、色々我慢はして来たけれども、安倍支持と言ってきたのが、移民法で、もう辞めようと、支持は出来ないということ、安倍さんの方にも通告したんですけども、やっぱり、その流れの中で、これから自民党が、どういう方向を見て行けるか、そのウクライナの問題が一応、明らかになったっていうところで、一応、ペテン師と言うと色々、私もあれだと思うけど（笑）」

モーガン「間違いないです。ペテン師です」

北村「(爆笑)」

モーガン「間違いないです」

水島「だから、これから彼女がね…」

モーガン「はい」

水島「どういう感じになってやるかですけれども、恐らく、私が前に言ったのは、所詮、そういうサファリパークの檻の中に入った、一種の猿山みたいな中でね…」

モーガン「そうです」

水島「権力争いしている状態だから」

モーガン「はい」

水島「正直言って、高市さんは何も出来ませんよと」

モーガン「そうです」

水島「もし、何か出来たとしたら褒めてやれるぐらいだと、それだけ厳しい状態の中で、彼女は出発しているってことですけれども、やっぱり今言った問題は、もう一つ、私が要素を言うと、草莽がちゃんと立ち上がらなければ、どんなに勇気のある人間でも安倍のこの舞になって行くっていうね」

モーガン「そうですね」

水島「そういうことがありましてね」

モーガン「はい」

水島「私が誤解したのは、辞めてから、もう一回、ロシアとか、自分で政治家をやり直そうとしていたっていうのがね、あの時、靖国神社へ行ったじゃないですか」

モーガン「はい」

水島「あの時、私は痛烈に言ったんですよ。何故、首相の時に行かなかったんだと。辞める前日でもいいから行けば良かったと。これで首相は靖国参拝に行かれないっていう前例を作ってしまった。それは、やっぱり高市さんがこの間、首相になって行かないっていう話になったというのは、安倍さんがつくったっていうところもあってね、あの安倍が出来なくて高市さんに出来る訳が無いというね。それで安倍の弟子みたいな周りの人達が今、みんな、駄目になっているじゃないですか。

LGBTとか夫婦別姓とか、古谷さんにしろ、稲田朋美みたいなね、左翼になっちゃった

ような奴とかね、こういう本当に凄い姿を見せられているところがあるから、じゃあ、我々は、こういう混沌の中で持つのは、やっぱり国民が、もう一回、きちんとやるしかないという思いがある訳ですけど」

モーガン「はい」

水島「モーガンさんはどうしたらいいと思います」

モーガン「LIVE配信では何をすればよいのかと、ちょっと言えないですよ」

水島「なるほど（苦笑）」

モーガン「ちょっと控えさせて戴きたいと思いますね」

一同「（笑）」

水島「なるほど。はい、よく解りました。というようなことで現実に厳しい時代の中で、これから未来を見なきゃいけないということだと思います。河合さん、お願いします」

河合「はい。まず、解散総選挙の話からですけれども、私も悪い人なので、恐らく解散総選挙は秋にあるんじゃないかと。一か月後ぐらいにあるんじゃないかと思っています。その根拠としては、まあ、やっぱり公明党の連立離脱というのは正直、票としては痛いと思うんです。計算できる票が計算できなくなりますから。ただ、やっぱり参政党や日本保守党さんに流れた保守層が、高市政権でガッツリ戻って来る。これは、もう自民党にとっては最後のチャンスだと思うんですね。

私は、大きく支持率が上がるんじゃないかなと思うので、その上がっているタイミングで勝負すると。要は、これがダラダラ半年経って1年経ってとなると、間違いなく、また、色々メディアで叩かれるとかあって支持率が下がっていくと思うので、ピークのところで解散を打つのがベストであると思います。

ヨーロッパでも本当に、ここ近年、右傾化というか保守化していて、もう本当に極右政党が30%取ってとか、ドイツにしてもイギリスにしてもフランスにしても各国、そういう流れになっていますから。日本でも正にこの2025年がそういう年だと思うので、まあ参議院選挙の結果を含めて、この数年で間違いなくヨーロッパの様な傾向になってくると思います。

ですから、この勢いに乗って、高市政権で解散して、公明党の分ぐらい取り戻せるのではないかと思うので、私は解散するというふうに思っております。それで、そこでしっかりした高市政権を築いて戴いて、我々保守層が常に訴えている問題、例えば不法移民の問題にしっかり取り組んで戴きたいですし、もう、我々埼玉の県民にとったら、この難民申請の不備というのは本当に死活問題なので、クルド人の問題と直結していますから」

水島「うん」

河合「本当に早急に着手して戴きたいと。難民申請の審査期間を短くするとか、強制送還も速やかに行って貰う、入国警備官の数を増やすとか強硬的にやって戴きたいということと、それから二つ目に、やはり、この外国人の労働者の問題ですね。人手不足だと言っ
て、どんどん外国人の労働者を増やしていくという問題、本当に人手不足なのかと。そもそも人手不足で何が悪いのかっていうところもあって、人手が足り過ぎたら失業率が上がるっていうことですから、足りていないぐらいの方がいいんじゃないかっていう説もあるぐらいで」

水島「そうですよ」

河合「そうですよね。だから、私は、この外国人労働者をどんどん増やしているのって、結局、企業が外国人を安いコストで奴隷みたいに使いたいだけ。そうして政治家が、企業からお金を貰っている。企業も株主の多くが外国人であることで、結局、そこですよ」

モーガン「それが、自民党ですよ」

河合「結局、そういうことですよ。だから、あいつらの都合で、企業の内部留保を増やしたいだけで、それが国民にトリクルダウン (trickle down) で全然、還元もされていないし、法人税は、どんどん下げて、消費税は、どんどん上げている、もう一般国民だけが負担させられて、企業と政治家だけが儲かっているような仕組みになっていますから、ここを本当に考えて戴きたいですね。

それでは経済が落ちる、落ちるって左派は言うんですけど、まず、やはり積極財政をしっかりとやって戴いて、高市さんも積極財政派ですから、そこは玉木さんの国民民主党と組むのか、ちょっと判りませんが、積極財政なり何なりで、何とか景気を回復していくということをやって戴きたい。

それから、私が先程、申し上げましたけど、人口侵略、もう、ここも本当に国防の観点ですわね」

水島「うん」

河合「国防の問題です。土地取得の話規制して戴きたいと。せめて規制まで行かないにしても税率を、かなり上げるとかね、海外だったら結構、税率、外国人の方がとるとかあるし、例えば、土地取得法と、ちょっと変わりますが、タジマホールとかへ行ったら、外国人が払う入館料と現地民の払う入館料と違う訳ですね。外国人は1万円ぐらい取られて、現地民の人は数百円で済むみたいなこともある訳ですよ。

だから外国人と日本人で差、つけることなんて全く差別でも何でもないし、そんなの海外に出たら、むしろスタンダードです。当然ですよ。だから土地取得の外国人に税率、何十パープラスかけますなんて当たり前です。日本経済の為に金をどんどん落として貰う。まあ、そういうことで西川口は今、正に人口侵略されかけていますから、埼玉県民としては、こういう問題も解決して戴きたいと思っています。

最後に、一番は、もう本当に皆さんに伝えたいのは、やっぱり、治安ですよ。治安を悪くするっていうのが一番、駄目です。何故かと言ったら、皆さんにとって本当に一番、大事なものは何ですかと。人生で一番、大事なものは何ですかと言ったら、やっぱり子供ですよ。自分の命を捨てても守りたいって子供じゃないですか。子供が一人で歩けないような街、治安にする訳にはいかないと、やはり一番、重要視して戴きたいなという風に思っています。本当に、この二つの道に分かれていると思うんですね。右の道、左の道に分かれていますと。

ここで本当に皆さんが、また次の色々、衆議院解散選挙があつたりして判断を求められると思います。その時に、自分の子供の顔を思い浮かべて欲しいです。さあ、どっちを選ぶんだらうっていう時に、左派の人達は、治安なんか悪くならないって言うんですよ」

モーガン「むちゃくちゃ」

河合「むちゃくちゃでしょ」

一同「(笑)」

河合「昨日、米山隆一さん、立憲民主党のハッピー米山さんと喋ってきたんです」

北村「どうしようもないね(笑)」

河合「ね。私、言ったんです。データで出ていますと。警察署のデータで外国人の犯罪数は日本と比べて2倍ぐらい。正確に言うと1.7倍ぐらいですが、出ているじゃないですかと言っても、いやいや治安なんて変わらないと。いくら外国人を入れたって全く変わらないんだって言う訳ですよ。もう、はあ～～っていう感じでね」

北村「それは、ただの願望ですね(笑)」

河合「ただの願望です。そう(失笑)、だってアメリカなんて殺人率が日本の20倍ですよ。強盗件数なんて200倍ですよ。だってアメリカって、たかだか日本の人口の3倍で

しょ。それなのに強盗の率が200倍ですからね。桁が二つ違うんですよ。それで治安が悪くならない訳が無いですから、その時に皆さんの子供の顔を浮かべて戴きたい。そして先祖の皆様にも感謝しなきゃいけないと思うんです。過去の私達の御先祖様が、ずうっと日本の最高の環境を作って下さって来た訳じゃないですか。

それを今、しっかり享受して、感謝して、僕達の代で、それを守って、そして、次の代に受け継いでいくっていうのが僕達の世代の使命ですから、これを守って行きましょうということをお伝えたいと思っています。はい」

水島「なるほどね。はい、有難うございます。現実の前に、これもご紹介しましたけど、江戸末期直前の時、同心の数が300名ぐらい。つまり100万人都市で、メインの警察官が300人」

北村「江戸期ね」

水島「ええ、そうそう。岡っ引きはね。下働きの人は居たけれども、これ、メチャクチャですよ。こんな安全な所が無いぐらいの都市だったっていうね。そういうのを含めて、あと幕末から明治の頃は、いつも言いますが、これ、繰り返しですけど子供が一番、可愛がられる国だと、外国人みんなが言っていた」

北村「子供が一番、幸せな顔をしているっていうね（笑）」

水島「そうそう、そう」

北村「一番、我儘だったって言っている（笑）」

水島「そういうような国だったと。我々が、こういう端境期というか、こういう時期に何を失ったのか。江戸から明治で何を失ったのか。勿論、皇室祭祀で言うと神道、仏教、儒教、まあ、朱子学ですけど、3つのものが、ちゃんと皇室の祭祀の中にあっただのに、明治維新になったら皇国史観という形でイデオロギーが変わって、仏教と儒教を捨てた訳ですよ。それで西洋近代を入れた。それで大東亜戦争まで行った。じゃあ、大東亜戦争の敗戦で何を失ったんだろうと言うと、そういう意味での、今、言った皇国史観とかね、こういう神道の、まあ、私は、それをいいと思っていないんです。皇国史観っていうのは、天皇は現人神と見るようなことは、と思いますけれども、ただ、今言ったそういうのも最後に失った。何が失われなかったかと言うと、庶民だけは一生懸命に働いて正直に真面目に頑張るということで、日本型の資本主義でナンバー2までいけた。これをやったらアメリカが、ぶっ潰しにかかった。

つまり何をやったかと言うと、今回は経済を最初にぶっ潰した。経済をぶっ潰したのが、今の状態。不景気30年。デフレ30年。ということは、その経済でやって、今度、その80年で心まで奪われたんじゃないかっていうことです。

つまり経済、まあ、戦争でやられて明治維新で色々なものもあったけど、次に新自由主義的な形で経済がグダグダにされた。グローバリズム経済。その次に我々日本人の魂そのもの心までも及んじやった。『洪水は我が魂に及び』って旧約聖書の言葉があるけど、本当に魂にまで及んじやっているんじゃないかと。

私達は、もう一回、それを立て直さなきゃいけないとか、再生とか、もう一回、やり直さなきゃいけない。というようなことを思っていますね、だから移民は本当に、具体的にやめなきゃいけないんじゃないかという感じがします。今日は本当に長い時間、大変、参考になるお話を色々伺いました。有難うございました」

一同「有難うございました（礼）」

***** お わ り *****